

虹色ストーカ―

◎登場人物

赤宮ルイ【あかみや】

24歳。書けなくなった小説家。5年前に処女作がヒットし文学界の革命児とまで言われるようになったが2作目の批判を受け、3作目が書けなくなった。熾烈な過去を持つ。そのせいか口が悪い。

橙谷スズ【とうや】

27歳。赤宮と青森の担当編集者。基本表情が笑顔でいじめられてもプラス思考。思ったことはすぐに口に出す。赤宮に惚れている。

黄瀬シヨウ【きせ】

57歳。橙谷の実の父親。元々大会社の社長だったが、ある時を期に引退。その巨万の富で死んだ飼い猫を祭る教会を建てて神父をやっている。

緑山レン【みどりやま】

25歳。喫茶店のマスター。元々詐欺師であり、赤宮とつきあっていた。「知り合った女全員とSEXをする。」という目標の持ち主。

青森ユイ【あおもり】

24歳。現在売れ行き抜群の人気作家。年齢詐称をしており、20歳と偽っている。常にノーメイク、スウェット。お菓子を持ち歩く。髪をくしゃくしゃする癖がある。

藍川トキ【あいかわ】

29歳。裏社会に通じる謎の男。5年前、赤宮と青森をかばい逮捕された。狂気のサディストであり、ルイの飼い主を自称する。ただし根っからの悪人と言わけてではなく。ルイを愛しているし、友人も大切にする。

紫【パープル】

年齢不明。黄瀬に飼われていた猫が神様になったもの。夏目漱石を愛読している。黄瀬の教会に住まい、人の前に現れ、「猫耳」を授ける。

死ぬまで進歩するつもりでやればいいではないか。

作に対したら一生懸命に自分のあらんかぎりの力をつくしてやればいいではないか。

後悔は結構だが、これは自己の芸術的良心に対しての話で、

世間の批評家やなにかに対して後悔する必要はあるまい。

夏目漱石

○プロローグ

舞台は教会。やや抽象的。客席が教会の椅子のようになっていいる。舞台中央には大きな十字架。舞台右隅にはタイトルの書かれた紙。左右に椅子と机。

客入れ時、荘厳な音楽が鳴り響く。役者は皆外にいる。いたる所から客を観察している。視線は客を追い続ける。

客入れ終了後、舞台中央に明かりが付くが誰もいない。そこから中から声が聞こえる。挨拶。注意事項等。

終えたところで、明かりが消え、音も止む。赤く藍は順に舞台上に上がり、祈り始める。最後に紫が現れる。

紫 恋は宇宙的な活力である。人が人を思う気持ちは、時に信じられない程の奇跡を生むものだ。

教会の鐘の音が鳴り、暗転。

橙谷 初めて会った時からあなたのことが好きでした！もしよろしかったら僕と付き合ってください！

明かりが付く。十字架に向かって祈る橙谷。

橙谷 神様！どうか僕をルイさんと結び付けてください！

走って出てきた赤宮に蹴り飛ばされる橙谷。

赤宮 はあ？何言ってるんのあんた！

橙谷 あのっ！だから！その！作家と担当編集者がそういう中になるのはまずいかなとも思ってたんですけど、僕そのためにルイさんの担当までのばりつめたと言いますか……やっぱり自分の気持ちは素直に伝えた方がいいかなと思います……。

赤宮 ……本気なの？

橙谷 ……はい。すいません。

赤宮 何で謝ったの？

橙谷 いや、つい。……ルイさん！ ルイさんが何を背負っているのかは知りませんが、僕で良ければ身代わりになりますから！

赤宮、橙谷を憐れむような目で見る。

橙谷 あのっ！ ルイさん？

赤宮 ……考えさせて。

橙谷 え？ 今何て？

赤宮 考えさせてって言ったの！ 今私それどころじゃねえんだよ！

橙谷 それは、つまり、保留ってことですか？

赤宮 そーゆーこと。

橙谷 やったー！ー！ー！ー！ー！

赤宮 は？

橙谷 保留ですよ！ 保留！ 私、橙谷スズ！

27年間生きてきて今日初めて、

女性に「無理。」以外の一言を頂きました！

赤宮 マジ？

橙谷 マジですよ！ ルイさー！ー！ー！ー！

橙谷、赤宮に抱きつこうとする。カウンターで蹴り飛ばされる。

赤宮 アホ。

一言言って、赤宮去る。

橙谷 あー！ー！ルイさー！ん。……行っちゃった。いやあ、でも、まさか「保留」をもらえるなんて、言ってみるもんですね！ やっぱり慣れるとは言え「無理。」って傷つきますから。「生理的に無理。」なんて言われちゃった日には、もう3日は次の恋ができないですからね。いやあ縁起担いできてよかったあ。

1人で舞い上がる橙谷、赤宮が去った後すぐに黄瀬が出てくる。困惑しながら、橙谷を覗きこむ。煙草をくわえている。

黄瀬 ほっほ。

橙谷 ああっ神父さん！

黄瀬 喜んでいるところを見ると、さっきの告白。成功したのかな？

橙谷　なんと「保留」をもらえたんですよ！

黄瀬　ホリユウ？

橙谷　はい？

黄瀬　保留と言うことは答えはまだ……。

橙谷　聞いてません。

黄瀬　ほっほ。初めて会う人に失礼かもしれんが、あんた、それ失敗じゃないかな？

橙谷　え？

黄瀬　わしの経験上、保留っていうのは、キープされとる可能性が高い。さっきの女、他に男がいるな？

橙谷　まっさか。

黄瀬　でなければ、その場でOKしとるだろ？

橙谷　あつ。

黄瀬　わしも若いころは何人も女性をキープにしたもんだ。ほっほ。

橙谷　がーーーーーん。

黄瀬　おおつ。口でがーんって言う奴初めて見たわ。

橙谷　そんな……。まさか、うそですよ。ちゃんと縁起も担いで来たのに。

黄瀬　その手に持つとるのは？

橙谷　カツオブシです。

黄瀬　は？

橙谷　縁起がいいんですよ。勝つ。男。武士！　カツオブシ！　です！　僕、勝負事的时候は必ず持つて行くようにしてるんですよ。大学受験の時もでっかい砂消しだつて言い張つて机の上に置いておきました。

黄瀬　ほっほ。若いの！　あんた、いいね、好きだ。

橙谷　いや、そんな、急に告白されても、まあ僕はおじいさんでもいけるクチですけど……。

黄瀬　ほっほ！（橙谷を思い切りどつく。）

橙谷　痛い！

黄瀬　まあここで会ったのも何かの縁。機会があつたらまた来なよ。

橙谷　はいっ。僕特にキリスト教とかじゃないですけど、ここ雰囲気いいんでまた来ます。

黄瀬　ほっほ。ここの神様はキリストじゃないよ。

橙谷　え？

黄瀬　猫だよ。

橙谷　猫？

黄瀬　ここはわしがかつて飼つていた猫のために建てた教会だ。

橙谷　　どんだけ金持ちなんですか！

黄瀬　　ほっほ。だからこの神様の名前はスズ様だ。

橙谷　　スズ？

黄瀬　　猫の名前だ。

橙谷　　僕の名前と一緒にすよ。奇遇ですね。

黄瀬　　……。

橙谷　　僕もスズって言うんですけどね、両親がいないんで、何でスズなのかってわかんないんですよ。

黄瀬　　鈴ってのは邪気を払うといわれている。

橙谷　　え？

黄瀬　　呼び鈴が鳴ると人が出て来る。スズは人を呼ぶ。そういう力があるのかもしれない。だからスズ。ほっほ。

橙谷　　だから猫にスズってつけたんですね。

黄瀬　　ほっほ。

橙谷　　僕この教会、通っちゃいますよお。信仰しちゃいますよお。

黄瀬　　しかし、キープの男がしょっちゅう来ていたら、教会の運氣が下がりそうだ！

橙谷　　ちよつと神父さん！

黄瀬　　ほっほ。

黄瀬、笑いながら去る。

橙谷　　キープの男か。ふっ（微笑）。

間。

橙谷　　えーーーーーー！　僕キープなんですか？　ええっ。

保留って100%成功するもんだと思ってました！　だって電話の保留だって、保留にした後ちゃんと電話に出るじゃないですか！　「電話にでんわ。」って言うてる場合じゃないですよーーーー！　何で保留なんだろう。うわっすごく気になっちゃってます。やっぱルイさんかわいいからすでに彼氏とかいるのかなあ？　でもそれだったら、保留じゃなくてくればいいじゃないですか！　保留にすることは何かのツピきならない事情があるんですよーーーー。ああっ！　気になる！　気になります。神様！　僕はどうしたらいいんでしょう？　黙って答えを待つなんて僕できません！　神様どうか僕をお救い下さい！

声 よからう。

橙谷 本当ですか？ありがとうございます！えっ！

周囲を見渡す橙谷。突如轟音がし、十字架の上が光る。

橙谷 うわああああああ！これはっ！

横から、紫が出てくる。

紫 やあ！

橙谷 そっちからかよ！

紫 精神的に向上心のないやつは馬鹿だ。

橙谷 え？

紫 精神の力は肉体に勝る。

橙谷 何の話ですか？

紫 お久しぶり、橙谷スズ。君を探していた。

橙谷 お久しぶりって何ですか？ どうして僕の名前知ってるんですか？

紫 私は1人であり、1匹でもある。複数であり単数でもある。

橙谷 どういうことですか？

紫 少し違うが、わかりやすく言えば、私は神だ。

橙谷 ええつまさか！ 確かに登場は派手でしたけど、全然神様っぽくないじゃないですか！ もろ人間じゃないですか！

紫 まあ信じるか信じないかは君次第だ。

橙谷 大体何ですかその耳は？

紫 さっき聞いただろ？ この教会の神は猫。猫耳くらいあって当然。

橙谷 それが、神の証……ですか？

紫 まあこれはとれるんだが。（猫耳をはずす。）

橙谷 えー……！ もう完全にただの変な人ですよあなた！

紫 変な人ではない。変な猫だ！

橙谷 変は認めるんですね。

紫 吾輩は猫である。名前はまだ無い。だから今決めた。私はパープルだ。

橙谷 スズ……ですよね？

紫 うるさい！ 私はご主人様に何度もパープルが良いと言ったのに、スズなんてありきたりな名前にされてしまったんだ。

橙谷 まあ猫が訴えても「にゃあ」としか聞こえませんもんね。

紫 何だ君は無礼だぞ。君が私に頼むからわっざわざ出てきてやったのに。

橙谷 なんかいしません。

紫 わかればいい。

橙谷 で、あなたは僕に何をしてくれるんですか？

紫 恋は宇宙的な活力である。

橙谷 え？

紫 君の恋の手助けをしてやろう。

橙谷 本当ですか？

紫 君が先程告白した相手、赤宮ルイ。彼女がなぜ君を保留にしたか知りた
いだろう？

橙谷 それはもちろん！

紫 これをやる。(猫耳を渡す。)

橙谷 知らないですよ。

紫 いや、君はこれを受け取るべきだ。運命は神の考えるものだ。人間は人
間らしく働けばそれで結構である。

橙谷 どういうことですか？

紫 いいか、この猫耳をつければ君の姿は他の人間から見えなくなる。

橙谷 そんなばかな……。

紫 信じるか信じないかは君次第だ。

橙谷 それで、どうしろと？

紫 赤宮ルイの動向を探るんだ。

橙谷 それってストーカーじゃないですか！

紫 何を言ってるんだ。君は元々、赤宮ルイのストーカーじゃないか。

橙谷 ちよっと何でそれ知って……。

紫 ただのストーカーから、彼女を思う気持ちのみで、担当編集者にまでな
った男だろ？

橙谷 いやあ。

紫 しかし、ただ追いかけているだけでは、何も変わらない。何も分からな
い。

橙谷 だからルイさんの担当編集者になったんです！

紫 恋心と言うやつ、いくら罵りわめいたところで、おいそれと胸の砦をで
ていくものではありません。

橙谷 さつきからちよいちよい名言ぽいこと言ってますけど、全部聞いたこと
あるような……。

紫 気にするな。私の趣味だ。

橙谷 はあ。

紫 君に恋の衝動を止めることは出来やしない。自分を変えるいい機会だと

思いたまえ。君は潜在的に他人を変える力を持っている。

橙谷　なんか照れますね。

紫　色に例えれば、橙、オレンジだ。その暖かさは太陽が如く周りを癒すだろう。見る者を元気にする。君がもっと積極的に動くことで、変わることもある。精々ががんばりたまえ。

橙谷　なんか嬉しいですね。そう言われると、やってやるぜって気になります。でも何で僕なんかに……。

紫　猫は気まぐれなんだ。……後、カツオブシが好物だ。

間。

橙谷　あつ！（カツオブシを投げる。）

紫　物分かりがいいじゃないか。じゃあまた、な。

橙谷　はい。

紫　おつと言い忘れてた。そいつは使い捨てだからな。1回つけて外すと効果が無くなってしまう。使ったらまた取りに来たまえ。私はいつでもここに
いる。

橙谷　はあ。

紫　私を呼ぶ時の掛け声は「パープル、パープル、プルルル」だ。

橙谷　何ですかそれは？　パープルパープルプルルル？

紫　そうだ。ふり付きで頼む。

橙谷　ふりつてどんな？

紫　君に任せる。

橙谷　えー……。

紫　後、猫耳をつけたまま他人に干渉することはできない。つまり猫耳をつけている間はそこに存在しないものになるということだ。干渉すればその瞬間に君の姿は他人から見られてしまう。覚えておきたまえ。

橙谷　信じるか信じないかは、僕次第……ですか。

紫　そういうことだ。また会おう。

紫、去る。

橙谷　何なんですか今のは……本当にこんなものが……。かなり胡散臭かったんですけどあの人。

そこに、青森が来る。お菓子を持っている。

青森 橙谷さん見つけました！

橙谷 あっ！ ユイさん！ どうしてここに？

青森 いたらまずいですか？

橙谷 いやそういうわけではないですけど。またそんな恰好で。

青森 ふあっしょん、めいく。私には無縁です。私は自己表現は小説で行います。

橙谷 ポリシーはわかりますけど、さすがに恥ずかしいですよ。

青森 お前のつらの方が恥ずかしいですよ。

橙谷 ぐさっ！

青森 橙谷さん、私の担当でもあるのにいつも赤宮ルイの方ばかりについてるんで。

橙谷 ああっ！ それはですね……。もごもご。

青森 大丈夫ですよ。わかってますから。それよりも橙谷さん大丈夫ですか？

疲れてるんですか？

橙谷 え？

青森 さつきからずっとここで独り言、言ってたじゃないですか？

橙谷 独り言？

青森 いつものことと言えばそうですが、誰かと会話している風だったので。

橙谷 えっ！ ユイさん、さつきまでここにいたスーツの男見てないんですか？

か？

青森 とうとう幻覚まで見えるようになりましたか。後、一歩です。橙谷さん。

橙谷 どういうことですかそれ？ あと一歩で僕はどうなってしまうんですか？

青森 さあ？ ところでそれ何です？

橙谷 これは、猫耳です。

青森 そんなものにまで目覚めたんですか？ 引きますよ私。

橙谷 ……。

青森 深刻に思いつめてどうしたんですか？ 本当にイっちゃったんですか？

橙谷 ……。信じるか信じないかはあなた次第です。

青森 救急車呼びましょうか？

教会の鐘が鳴り、静止。音楽が流れオープニング。全員で猫耳を着け追いかっこ。最後に一文字ずつタイトルが書かれたボードを持ってきて一斉にオープン。「虹色ストーカー」。橙谷、舞台、隅の紙をめくる。「色色スピーカー」

○色色スピーカー

暗転。椅子と机を中央に移動させ、舞台は喫茶店。

赤宮にスポットが当たる。

赤宮 書けないんだよ！私が次回作を出版するってことは、日本文学界に革命を起こしたとまで言われる私の処女作を超えなきゃなんねえってことなんだよ！ どういうことなの？ 何で処女作を超えられないんだって批判されなきゃいけないんだよ。私が私を超えるってどういうことなの？ 私は私であって私の全てをぶち込んだ私の処女作を超えるってことは私の全てを否定しなきゃなんねえってことだよなあ！ あんたにこのプレッシャーがわかるか！ ここで決まっちゃうんだよ！ 私が本当の革命家になれるか、奇をてらって一時的に世間をにぎわす一発屋になり下がるかが次の一作に懸かっているんだよ！ 閃かねえんだよ！ 浮かんてこねえんだよ。……私は今、砂漠の中にいる。創造力という名のオアシスを求めて、私はこの既成物の砂であふれかえっている砂漠の中をさまよい歩いているんだ。水ゝ水ゝ水ゝ。いくら探してもオアシスは現れない。どこゝ！ 水ゝ水はどこんだよお！！！！
フアーーーーーック！！！！

突如ばしゃーんと水の音がして、「うわあああ！」と声がする。舞台が明るくなり、そこには面白いポーズをした橙谷が立っている。赤宮は空のコップを持っている。ステイビーワンダーの曲がかかる。

橙谷 何するんですかいきなり！

赤宮 よけんなよ！ スズが言ったんだろゝ！ 私の身代わりになるって！

橙谷 いや、確かに言いましたけど……。

赤宮 ほれっ！ こゝなるより全然ましだろゝが！

赤宮、手首を橙谷に見せる。手首には包帯が巻いてある。

橙谷 ……。

赤宮 あんた言ったよなあ！ 私のペットになるって。絶対服従だって！

赤宮、橙谷を足蹴にする。

橙谷 そりやもうルイさんのためなら！（嬉しそうに）……ってちよつとちよつと、僕ペットなんて言っていないですよ！

赤宮 似たようなもんだよ。はいっ餌！

赤宮、テーブルの上のパンを投げる。

橙谷それをキャッチして食べる。

橙谷 わんっ！

赤宮 ほれみろっ！

橙谷 犬です！ 僕はルイさんの犬であります！

赤宮 よーし忠犬スズ公！ なんかおもしろいことしろ！

橙谷 は？

赤宮、煙草に火をつける。

赤宮 だーかーら！ なんかおもしろいことしろって言ってるの！

橙谷 でも僕犬ですしそうゆうのはちよつと……。

赤宮 ご主人様の命令には絶対服従！

橙谷 はいっ！ 橙谷スズ！ ルイさんのためにおもしろいことさせていただきます！

スズ、一発ギャグ。おもしろくない。

赤宮 つまんねーんだよ！

赤宮、橙谷を蹴飛ばす。

赤宮 あゝ今おもしろいことしてくれてたら、私の中でアドレナリンが出まくって、なんか書けそうな気がしたんだけどな。

橙谷 そっそうなんですか。そういうことなら頑張っちゃいますよ僕。

橙谷、一発ギャグ2連発。おもしろくない。

赤宮 なめてんのか！

赤宮、橙谷の頭をぐりぐりやる。

橙谷 痛いっ痛いです！ルイさん！
赤宮 あんたがつまんねえのがわりいんだよおお！
橙谷 おかしいなあ。高校の修学旅行でやった時はうけたんですけど・・・。
赤宮 笑いのハードルが低いんだよ。

赤宮と橙谷が騒いでる中、緑山が入ってくる。

緑山 ちよつと赤宮。困るよ。

橙谷 そうですよねえ。すいません。店内でこんなに騒がしくされたら困っちゃいますよねえ。

緑山 店内は禁煙だよ。いつも言ってるだろ、赤宮。

赤宮 知ってる。

緑山 知ってるならやめろって。

赤宮 やだ。

緑山 じゃあ出て行ってもらうぞ。

橙谷 ルイさん。タバコ吸うのやめましょうよ。緑山さん困ってますって。

赤宮 やめない。出ていかない。

緑山 お前なあ。

赤宮 ほつとけよ。どーせ私たちの他に客なんかいねえんだからいいだろ？

緑山 客、来るぜ。

赤宮 は？

緑山 青森ユイが今日来るってよ。

緑山、赤宮からタバコを取り上げ、火を消す。

赤宮、緑山を睨む。

赤宮 何それ？ スズが呼んだの？

橙谷 いやあ、ははは。

緑山 青森も橙谷さんの担当だろ？ お前がいつも橙谷さんキープしてるから、それに腹立てた青森がわざわざこっちに来るんだと。

橙谷 キープ？ やっぱりキープなんですかね？

緑山 はい？

橙谷 あっ何でもないです。

赤宮、橙谷を睨む。

橙谷 これはその不可抗力と言いますか……。喫茶店はみんなのものと
すか……。

赤宮 てか何でレンがそれを知ってるわけ？

緑山 青森が言ってたから。この間1人で喫茶店に来たんだ。

赤宮 ふうん。どーせいつもの甘い言葉で口説き落として色々おしゃべりした
んじゃねえの？

緑山 してねーよ。てかできないねアレは。世界中の女を口説く俺でもアレは
厳しい。

赤宮 あっそ。

緑山 いや、頑張れば、いけるか。

赤宮 そうね、私も簡単にはめられたからな。

緑山 違う。お前に対してのは愛だ。他の女のは恋。

赤宮 何それ。違ってたら何？ 間違いを正してやり直そうとでもいうわけ？
海よりも広い心を持った赤宮ルイさんなら僕の犯した過ちを赦したもうて、
もう一度やり直す機会を与えて下さるに違いない……なんて思ってるわけ？

緑山 思ってるねえよ。ただ、誤解されたままにいるのが気に食わねえだけだよ。

赤宮 気に食わなくてもかまわないし。

緑山 俺が嫌なんだよ。

赤宮 もうあんたとは、他人なんだから、関係ないでしょ？

緑山 別れたって他人にはならないだろ？

赤宮 なる。する。

緑山 するってなんだよ。

赤宮 私の脳があんたを他人と判断するってこと。

緑山 なんだそりゃ？

橙谷 あのと。お2人はもしかせんでも……元カップルってやつですか？

赤宮 だったらなんだよ。

橙谷 が——————ん！

橙谷、その場にへたれこむ。

緑山 自分の口でがーんっていう奴始めて見た。

赤宮 何落ち込んでんだよ！ てか気づくの遅いんだよ！ レンとあんたが知
り合ってからもう結構経つんだけど！

橙谷 そんな……。ルイさんがつきあったことがあるなんて……。ルイさん
の処女は僕が手に入れるって決めてたのに……。でも諦めませんよ。いつか、

いつか必ずペットから彼氏に昇格して見せます！

赤宮 きもいんだよ！ つきあったことなんてありまくりだよ！ やりまくりだよ！

橙谷 じゃあ僕もそのやりまくりの中に入れてくださーい！

赤宮 バカなことやってんじゃねえよ！

赤宮、橙谷に蹴りを入れる。

緑山 息びったりだな。

赤宮 私が？ このアホと？

緑山 ああ。見てて微笑ましい。

赤宮 はあ？

緑山 お前、橙谷さんがいなかったら生きてけないだろ？

橙谷 いやあ緑山さんにそう言われると照れちゃいますねえ。

赤宮 はあ？ 別にこんなのがいいまいが。

橙谷 ルイさくん。

緑山 どうする？ 近いうちにこの人が死んじゃったら。

橙谷 いやいや、殺さないでくださいよ！ 僕は長生きしますよ。

赤宮 別に。どーもしない。

緑山 あっそう。まあとにかく青森と同じ空気を吸いたくないと思ってるお前はとつとどこから帰るべきだと思うけどね。

赤宮 私はここに仕事しに来てんだよ！ 誰が来ようと関係ない！

緑山 親切で言ってやってんのに。意地はんなって。

赤宮 はってない。うるさいっ！ 執筆の邪魔！ どっか行って！

赤宮、ノートパソコンを立ち上げる。

緑山 やれやれ。

緑山立ち去ろうとする。橙谷それを追う。音楽が止む。

2人に光が当たる。

橙谷 いつもいつもすいませんねえ。

緑山 まあ、あいつの言うとおり橙谷さん達以外客はいないからいいんですけど……。てか、橙谷さん。何であなたいつも赤宮にべったりなんですか？ 確かに赤宮はあなたの担当ですけど、それは青森も一緒でしょ？

橙谷 それはそうなんですけど……。心配なんですよルイさんが。ユイさんは僕がいなくてもちゃんとやってける人ですから。

緑山 ふうん。赤宮はあなたがついていないとダメってことか。

橙谷 いやいや、ダメとかじゃありませんよ。ただ心配なんですって。

緑山 ふうん。

橙谷 ……緑山さんが、ルイさんと付き合ってたのは、ルイさんが売れる前からですよ？

緑山 そうですけど？

橙谷 別れたのは、ルイさんが1回売れてからですよ？

緑山 まあそうなりますね。

橙谷 何で別れたんですか？

緑山 俺の浮気……ってことになってる。

橙谷 ってことになってる？

緑山 そ。

橙谷 でも何かルイさんが勘違いするようなことをしたってことじゃないんですか？

緑山 してない……とは言いきれません。ほら、俺の目標って知り合った女全員とSEXすることだから。

橙谷 なんですかその目標は！ 羨ましくすぎます！

緑山 でも俺は浮気はしてないです。SEXすれば浮気ってんなら浮気ですけれど。

橙谷 え？ 他の女とSEXしたってことですか？

緑山 しましたけど？

橙谷 そそそそそそんなの浮気じゃないですか？

緑山 浮気じゃないです。俺の中の1番はいつでも赤宮だったんですから。愛です。

橙谷 そんなの無しですよ。それじゃあルイさんが傷つくに決まってますよ。

緑山 わかんないなあ。SEXは性欲の解消であって、そこに愛情はないんだけど。

橙谷 それはダメですよ！

緑山 ううん。

橙谷 ……あのっ！（大声で）

緑山 なんですか急に。

橙谷 ルイさんを頂いてもよろしいでしょうか？

緑山 ……。

橙谷 僕がルイさんを幸せにしますから。ルイさんを頂いてもよろしいでしょ

うか？

緑山 （声をあげて笑う）俺はあいつの親でも何でもないですよ。ただの元彼なんですから。やっぱおもしろいなあ橙谷さんは。

橙谷 え？

緑山 恋は盲目って言いますが、俺は愛は盲目だと思うんですよ。

橙谷 はあ。

緑山 恋は盲目の方はあんまりいい意味じゃないですけど、愛は盲目ってのは盲目だからこそ強い力が生まれると思うんですよ。

橙谷 あっそれ何かわかります！

緑山 わかります？ あのステイビーワンダーも盲目だったからこそ、あそこまでの音楽を作り上げることができんですよ。目が見えない代わりに神が与えたんです。そう思いませんか？

橙谷 思います。そういうのってありますよね。

緑山 昔、この店を出す時に俺の恩人が紹介してくれたんです。

橙谷 ステイビーワンダー？

緑山 そ。だからこの店の名前も「心の愛」なんです。

橙谷 ああ！ すいません何か気づかなくて。僕も昔好きだったんですよ。ステイビーワンダー。

緑山 俺は彼みたいになりたいんです。

橙谷 ミュージシャンになるんですか？

緑山 （笑う）違いますよ！ どうやって喫茶店のマスターからミュージシャンになるんですか？ 「人間的に」です。おもしろいなあ。

橙谷 コーヒー入れるのを待ってる間にミュージック？みたいな。

緑山 （笑う）いいですよ。

橙谷 え？

緑山 さっきの。いいですよ。赤宮をもらってって下さい。赤宮がいいって言えばそれでいいですよ。

橙谷 ほっ本当ですか？

緑山 ええ。

緑山、立ち去る。橙谷、赤宮の元に戻る。光も戻る。

橙谷 ルイさんを頂いてもよろしいでしょうか？

赤宮 は？ 何訳わかんねえこと言ってるんだよ。さっさと飲み物持ってこい！

橙谷 はい！ ただ今！ 緑山さくん。

橙谷、走って飲み物を持って、戻ってくる。

橙谷 お待たせしました。
赤宮 ん。

赤宮、飲み物を飲み、頭をがりがりかく。

赤宮 書けない……。何も思い浮かばない。

橙谷 そんな時はあれです。ほらっ踊りましょう！

赤宮 は？

橙谷 ミュージック！スタート！

突如、音楽が鳴り出し橙谷が踊り出す。

橙谷 ほら、ルイさんも一緒に！

赤宮 はああ？意味わかんないんだけど。

橙谷 ほらっ。ほらっ。ほらっ。ほらっ。

赤宮 ……。

携帯電話の音が鳴り、音楽が止む。

橙谷 あっどうも橙谷です。いつもお世話になっております。え？ 赤宮ルイの原稿？ はい。すいません。もう少しお待ちください。いろいろ問題がありまして……。はい？ 青森ユイの？ あっ、はい今日受け取ることになっております。あっありがとうございます。え？ 青森ユイがいなかったら？ 僕なんて。クビにしてやるのに？ あははははは。また御冗談を。え？ 本気？ 赤宮ルイから原稿を？ いやいや確かに期限はとくに過ぎてるんですけども。え？ もう戻っても僕の席がない？ そんなああ。あっ段ボールが置いてある。椅子が欲しかったら、赤ちゃん用のおまるが。あっ。ありがとうございます。いやいやそれはもう。十分。はい。では失礼します。

橙谷、電話を切る。

橙谷 さあ中断してしまいましたが、続きを踊りましょう！

別のステイビーワンダーの音楽再開。(小さめ)

赤宮 あんたってさあ、いじめられてるだろ？

橙谷 そりゃもちろん。こんなんですもん。こんないたら誰だっていじめたくなるでしょう？

赤宮 それ自分で言っちゃうかねえ。

橙谷 聞いて下さいよ。僕、編集社戻ったら段ボールとおまるが机と椅子として用意されてるらしいですよ。トイレに行く必要無いって感じですよね？カタツムリでもトイレはさすがにくっついてないですよ。

赤宮 おもしろくないからそれ。むしろつらいことだから！

橙谷 そうですか？でもトイレ行く暇が省けちゃうっていう優れモノなんですよ。

赤宮 ……あんたさあ、何でもいつも笑ってるわけ？

橙谷 はい？

赤宮 何で笑ってられるわけ？何が楽しいわけ？

橙谷 いや、あの昔からの生きるための術と言いますか……。楽しいから笑ってるんじゃないくて、笑ってると楽しくなるみたい。つらい時こそ笑えっていうか……。だからルイさんももっと笑った方がいいと思うんですよ。

赤宮 ……。

橙谷 あれっ？ どうしたんですか？

赤宮 おもしろいことしろよ！

橙谷 ええっ。

赤宮 あんたがいったんだろ？ 笑った方がいいんだろ？ じゃあ笑わせろよ！

橙谷 笑わせろ……。ってそれじゃあちよつと僕が言ったことと違いますよ！

赤宮 いいんだよ！ 細かいこと気にすんなよ！

橙谷 わかりましたよ。じゃあ僕のお母さんの真似します。

橙谷、お母さんの真似をする。特におもしろくない。

赤宮 似てるかどうかもわかんねえだろーが！

橙谷 それはルイさんが僕のお母さん知らないからですよ！

赤宮 当たり前だろーが！

橙谷 あっ！ ああっ！

赤宮 急になんだあ！ 誤魔化そうたってそうはいかねえよ。

橙谷 ユイさんです！
赤宮 ！

青森 ユイが入ってくる。お菓子を持っている。

橙谷 またそんな恰好で……。

青森 こんにちは。橙谷さん。昨日は大丈夫でしたか？

橙谷 あっはい。おかげさまで、どこも悪くないのに救急車に運ばれてしまいました。

赤宮、パソコンの画面に向かう。青森、赤宮の後ろに回り込んで、パソコンの画面を見る。何も書かれてない。微笑する青森。

赤宮 なんだよ！

青森 赤。

赤宮 は？

青森 あなたの好きな色です。パソコンも洋服も靴もみんな赤。

赤宮 それがなんだってんだよ。

青森 情熱の象徴である赤。革命の象徴である赤。確かに以前のあなたにはとてもよく似合っていました。

赤宮 は？

青森 でも今はその気持ちばかり先に出て、いつもいつも空回りばかり。

成功したのは最初の2回だけで、その後はもう何も出てこない。「私を見て。」と言いたくても、その私はどこにあるのか分からない。中身がないくせに外見ばかり気にして虚栄心の赤で塗り固められています。

赤宮 何が言いたいんだよ！

青森 これは次回作の小説の主人公です。書けなくなった作家を主人公にしようかなって考えているんです。はじめまして。一応小説家をやらせてもらっています。大学2年生の青森ユイです。

赤宮 はじめまして。

青森 相席いいですか？ 私、橙谷さんに用があつて来たんです。いつもあなたが橙谷さんを独り占めにするからなかなか会う機会が無くて。

橙谷 いやいや、色々忙しかったんですよ、ねえ！ ルイさん。いや別に相席じゃなくても向こうの席に移ってお話すればいいじゃないですか？ねえ？

赤宮 私は別にかまわないけど。

青森 さすが文学界の革命児、赤宮ルイさん。器が大きいですね。いまにも飛ぶ鳥を落とす勢いで、落とされてしまいそうなのに。その追い込む相手との相席を許すなんて。器が大きいか、プライドが無くて諦めてしまったかのど

ちらかですもんね。

赤宮 ……。私今仕事だから、あんまりぎやぎやあ喚かないでもらえる？

青森 仕事？へえルイさんって、まだお仕事なさるつもりなんですか？楽しみですね。次回作がいつ読めるようになるのか。

赤宮 ……。

橙谷 じゃっじゃあ、とりあえずなんか頼みますかねユイさん。何がいいですか？

青森 飲み物だけでいいです。お菓子ありますし、そんなに長居するつもりもないですし。

橙谷 わかりました。じゃあコーヒーだけでいいですね。

青森 はい。

橙谷 緑山さん。

緑山 はい、ただいま。

橙谷 いつものコーヒー1つ。

緑山 かしこまりました。

青森 聞きましたよ。ルイさんと付き合ってたんですね。大作家とイケメン喫茶店マスターのカップルって素敵ですよ？でも書けなくなつた作家だと釣り合いが取れないような気がしますね？ズバリ別れた原因はそこら辺にあるんですか？

緑山 ズバリそこら辺にない。俺のせいらしいよ。そのくせまだこの店にしょっちゅう来るんだから。

赤宮 うるさい。

橙谷 ほらっ！いいじゃないですかそういうことは。ユイさん今日は原稿を持ってきて下さったんでしよう？

青森 はい。期限よりも早いんですけど書きあがったんで。

青森、鞆から原稿の入った袋を取り出し、橙谷に渡す。

青森 今回は、サスペンスものを書いてみたんですよ。完全記憶能力を持つバーのマスターが活躍するんです。どうですかルイさん？完全記憶能力。

赤宮 えっああ。いいんじゃない。

青森 ルイさんは忘れたいことっていっぱいお持ちでしょう？

赤宮 どういう意味？

青森 ルイさんほどの大作家ともなるとそれはそれは熾烈な過去をお持ちなのかなあと思ひまして。

赤宮 別に……。普通だよ。

青森 忘れたいことに限って、人は忘れることができないもんですよ。

橙谷 そーなんですよ。この間家にあるA Vを封印しようと思いついて、箱に入れて鍵をかけたんですよ。だからそのロックナンバーを忘れたいと思ってるんですけど、全然忘れらんないんですよ。普段は忘れてるつもりでもこうむらむらしてくると、脳が活性化されるんですかねえ。いつの間にかロックを解除してA Vを見てるんですよ。

緑山 それ忘れるつもりはないですよ。

橙谷 いやいや、禁欲生活ってやつですよ。

青森 そうそうルイさん。じつは私、今日ルイさんをお願いしたいことがあって来たんです。

緑山 お願い？

青森 賭けと言うこともできるかもしれませんが。

赤宮 賭け？ 何？

青森 私の小説が今苗木賞の候補になってるんですけど、もしも私が苗木賞を取ったら、橙谷さんを解放してください。

赤宮 は？

青森 書けない作家に担当編集者は必要ないでしょ？

橙谷 なんなんな何言ってるんですか！ ユイさん！

青森 本当のことを言っただけですよ。作品を生み出す可能性のない、卵を産む可能性のない雌鶏の前でご飯茶碗を持って待っていても無意味ですから。

橙谷 ユイさーん。

赤宮 わかった。勝手にすれば。

橙谷 ちよっとルイさん！

青森 ありがとうございます。多分すぐに結果が出ると思うんで、よろしくお願いしますね。

赤宮 ん。

赤宮、パソコンを片づけ帰り支度を始める。

橙谷 あれルイさんどうしたんですか？

赤宮 帰る。

緑山 だから言ったのに。

緑山、去る。

橙谷 ルイさん。

赤宮 帰るつつつてんの！

青森 ルイさんって、自宅では執筆しないことで有名じゃありませんでしたっけ？ 帰ってお仕事なさるんですか？

赤宮 ファック！！

赤宮、吐き捨てて去っていく。青森、冷やかに笑う。

橙谷 ちよつちよつとルイさん！

赤宮 うるさい！ ついてくんな！

橙谷 でもですねえ。

赤宮 来んなって言うてんだろ！

橙谷 いやいや。しかしですね……。

橙谷、荷物を持って後を追う。

橙谷 ユイさん、僕、お金払っておきますから！

青森 ……。

青森、机をたたく。緑山、コーヒーを持ってくる。

その後、橙谷猫耳をつけて戻って来て来る。

緑山 何であんたそんなに赤宮に食ってかかるんだ？

青森 あなたには関係の無いことです。

緑山 そこまで敵視するんだからそれなりに理由があるんじゃないの？

青森 言っときますけど私は赤宮ルイを敵だなんて思ったことは一度もないですから。巨象は蟻んこがいくら吠えていたって気づかない。その歩みを蟻んこのために止めたりはしない。蟻んこはどうしても目立ちたくってその体を血で赤く染めるんです。だけど巨象はそんなものはない。気づきもしない。見えているのは目の前に広がる高原のみ。そして私は踏みつぶす。ぐしゃつとすら音を立てない。プチつとすら音を立てない。そんな赤い蟻んこを私は踏みつぶす。他の蟻んこ達と同じように。

緑山 そうやって過剰に反応するのは、気にしてる証拠ってね。まあいいけど、あんた達の仲が悪いと、間に入った橙谷さんは大変だね。

青森 橙谷さんは、

緑山 ん？

青森 橙谷さんは幸運を呼び寄せる力があるような気がします。まあ私そういう

うの信じてないですけど。

緑山 それ賛成。あの人は人を引き付ける何かを持ってるよね。

青森 私はあなたにも何か感じます。

緑山 気になるってことかな？

青森 調子に乗ってんじゃねえよ……です。

緑山 無理やりな「です。」だな。

青森 こんな人が全く来ない辺鄙なところで、大して美味しくも無いコーヒーを売って生計を立ててる25歳。私にはとても信じられません。何か隠していますね？

緑山 そういふ君も何か隠してるでしょ？ ただの大学生には見えません。

青森 作家ですから。

緑山 そういうことじゃないんだよなあ。

青森 スティービーワンダー。

緑山 え？

青森 好きなんですか？ この間来た時も流れていました。

緑山 気付いた？ そうなんだよ。

青森 気づきます。店の名前も「心の愛」ですし。

緑山 尊敬してるんだ。

青森 だったら彼が音楽に対してそうしたようにコーヒーにもつとこだわりの持った方がいいんじゃないですか？ スティービーワンダーは音楽の質に相当こだわるらしいですよ。数千曲が今までお蔵入りになってるそうです。

緑山 SEXの質にはこだわるよ。

青森 この下衆が、です。

緑山 下衆って……。心外だなあ。

青森 ごちそうさまでした。

緑山 大して美味しくなくて悪かったね。

青森 一昨日きやがれな味です。

青森、出て行こうとする。

緑山 また来てね。

緑山、食器等を片づける。

橙谷 この猫耳……本物だ！ すごい！ すごいです！ 誰にも見えてない！
これでルイさんをストーカー！ いやいや護衛すれば……そのうち保留の理

由がわかるはずですよ！　そうと決まれば早速ルイさんのところに……って、あ………。実験に夢中になりすぎて、ルイさんの行方がわからない！　あっそうだ！　ルイさんに電話して居場所をつて、これ被ったまんまじゃ他人と接触できないんだった！　あっ！　てことはこれで今日の分お終い？　え……うそですよ。いやですよ。

混乱している橙谷の前に青森がふっ飛ばされて来る。

橙谷　え………！

青森、飛ばされてきた方向を睨む。

緑山　どうしたの？　大丈夫青森？
橙谷　ユイさん！

藍川トキが入って来る。

藍川　隠し事してもてめえに得はねえぞ？　おとなしくルイの居場所を吐け！
青森　知らないって言ってるんです。

緑山　トキさん。

藍川　ああ、レン。丁度よかった。久しぶりだな。

緑山　お帰りなさいトキさん。

藍川　ああ、5年も入れられちゃった。

緑山　その節はどうも。

藍川　あれは俺の主義だ。気にするな。

緑山　そう言っていただけと助かります。

藍川　それよりもルイの居場所を教える。

緑山　え？

藍川　この女が答えねえんだ。

青森　だから知らないんです。

藍川　恩をあだで返すようなことしやがって。

青森　……。

藍川　ルイはどこにいる？　あいつ電話に出ねえんだ。

緑山　探してどうするんですか？

藍川　おいおい。会っちゃいけねえってこたあないだろ？

緑山　……俺、あいつと別れました。だからわかりません。

藍川 別れた？
緑山 はい。
藍川 そうか。……それはあいつのためか？
緑山 やっぱりばれます？

藍川、席に座る。

藍川 お前が、引退して、喫茶店を始めた時から、そうなる気はした。
緑山 そうですか。
藍川 (笑う)
緑山 何ですか？
藍川 まだ聞いてたんだな。ステイビーワンダー。
緑山 そりゃあもちろん。トキさんが紹介してくれたんですもん。
藍川 (大声で笑う。)
緑山 何が可笑しいんですか？
藍川 いや、で、ルイの居場所は？
緑山 また、あいつに何かやらせるつもりですか？
藍川 俺が務所にいる間、お前達には色々あったらしいが、あいにく俺は5年前から時間が止まっちゃったまんまなんだ。
緑山 赤宮が小説家として成功したことは、トキさんも知ってるはずだ。
藍川 俺には関係ねえ。
緑山 ……。
青森 藍川さん、赤宮ルイのなんなんですか？
藍川 飼い主。
青森 は？
藍川 飼い主だって言ってるんだろ？
青森 どういう……
藍川 知りたいか？ だったらお前も一度俺のペットになってみるか？
青森 は？ 何言ってるんですか？
藍川 ルイも最初はそうやって反抗的だったんだ。犬と一緒に。初めはなかなかご主人様の言うことを聞かねえもんさ。

藍川、突然青森を殴る。倒れる青森。

橙谷 あっユイさん！
緑山 ちよっとトキさん！

藍川 うっせえ黙ってる！

緑山 ……。

藍川 だがこうやってしつけをしないとだんだん言うことを聞くようになっていくんだよ。

青森に覆いかぶさり髪の毛を引っ張り、顔を近づける。

藍川 「生意気言ってごめんなさい。」って言ってみろ？ そしたら今日は終わりにしてやる。

青森 何で私が謝らなきゃ……。

青森の口を無理やりあける藍川。

藍川 わからねえようだからもう一度だけ言ってやる。「生意気言ってごめんなさい、これからは言うこと聞きます。」って言え！

橙谷 さつきより増えてるじゃないですか！

藍川 おら、言ってみろよ。

青森 ……。生意気言ってごめんなさい、これからは言うこと聞きます。

藍川 言えるじゃねえか。

青森 ……。

緑山 ……トキさん。

藍川 何で俺がお前にステイビーワンダーを紹介したか教えてやろうか？

緑山 え？

藍川 あの男はな、別れた女から一生交際する約束を反故にされた上に、性病をうつされたつつて、訴えられたんだよ。

緑山 ……皮肉ですか？

藍川 ルイは俺のもんだ。

緑山 それを、俺は5年間も流し続けてたわけか。

藍川 そりゃ笑っちゃまうだろ？ じゃ、またな。

トキ出て行く。

青森 殺す。殺す。あいつ殺す。殺す！ 殺す！ 殺す！

緑山 落ち着いて。大丈夫？

青森 お前に心配されたくねえです。

緑山 大丈夫そうだね。

青森 緑山さんはあの男と知り合いなんですね。

緑山 君もね？

青森 私は、おそらく緑山さんほど縁が深くないです。

緑山 ああ、そう。

青森 私、帰ります。

緑山 うん。

青森、去る。

橙谷 うわあ、ルイさん大丈夫かな？ そうだ！ ルイさんのところに行かなきゃ！ ルイさんの居場所は……わかんないや、電話で聞こう……ってこれ被ったまんまじゃ他人と接触できないんだった！ あっ！ てことはこれで今日の分お終い！ わあ、そうだ！ またパープルさんに会いに行こう！

橙谷 出て行こうとしてスピーカーを落とす。

橙谷 うわっ！

緑山 あっ！

橙谷 逃げるように去る。

緑山 あゝあ。壊れちゃった。

役者静止。教会の鐘が鳴り、役者移動。

明転。

明転時、舞台装置は役者が猫耳をつけて動かす。

舞台は教会。

橙谷 パープルさん。パープルさん！

無音。

橙谷 パープルさん。猫耳もらいに来ました。

無音。

橙谷 あれっ。あっそうだ。掛け声か。パープルパープルルルル！

無音。

橙谷 あれっ。あっそうだ。振り付けいるんだ。パープルパープルルルル。
(振り付き)

紫笑いながら出てくる。

紫 本当にやってるよ。

橙谷 騙したんですね！

紫 私の趣味だ。それに騙してはいない。それを言われなければ私は出てこないのだから。ルールを作るのは私だ。

橙谷 はあ。

紫 そんなことより何だ？ 信じる気になったか？

橙谷 そりゃあもちろん！ すごすぎですよ！

紫 で、猫耳か？

橙谷 そうですよ！ 猫耳ですよ。実験のために1回使ったらそれで終わっちゃったんですよ。次下さい。

紫 この間言い忘れていたが、この猫耳、後2個しかないからな。はい。(猫耳を渡す。)

橙谷 えー……！そういうことは先に言ってくださいよ！ すぐになくなっちゃうじゃないですか？ 後たった2個ですか？

紫 ……。

橙谷 本当、今日大変だったんですよ。ルイさんまるで何事も無かったかのうに接するんですよ。僕もなるべくいつも通りに振舞おうとしたんですけど、ひやひやもんですよ。言葉に過敏に反応しちゃうんですよ！

紫 食いたければ食い、寝たければ寝る、怒るときは一生懸命に怒り、泣く時は絶体絶命に泣く。常に君らしく行動したまえ。

橙谷 猫じゃないんだからそうもいきませんよ。

紫 私は人間のそういうところが嫌いなんだ。やりたいことをして何が悪い。なぜ人の目を気にする必要がある。思うことがあれば言えればいい。1つの生命体として魅力のあるものとは、自分の命を自分のために燃やしているものだと思うが。

橙谷 みんなそうしたいんですよ。だけど世の中なかなかそうもいかないじゃないですか？ この僕ですら、周囲を気にして生活しているんですよ！

紫 なぜ自慢げだ？

橙谷 いや僕も人並みな人間と言うことをです。陰口とか周囲の目とか……。

紫 しかし、この猫耳をつければその周囲の目は無くなる。もちろん陰口利き放題。その間くらいせめて好きなことをしたらどうだ？

橙谷 ……はいっ！ 絶対にルイさんの悩みを解決して見せます！

紫、笑う。

橙谷 なんですか！

紫 いや、普通の人間ならば、その力があれば、ただで映画を見に行ったり、女湯を覗こうとしたり、そういうことにそれを使いそうなものだが、君は違うんだな。

橙谷 ああっ！ 透明ってことはそんなことできちゃうんですね！

紫 考えもしていなかったか。

役者静止後、鐘が鳴る。

明転。

役者移動。橙谷紙をめくる。「鈍色スモーカー」

○鈍色スモーカー

再び舞台は喫茶店へ。赤宮ボードを持っている。スピーカーは無い。

赤宮 スター覗き見ランキング！ 第3位、橙谷スズ、おもしろい話。第2位、

橙谷スズ、おもしろい話。第1位、橙谷スズ、おもしろい話！ じゃあまず

3位の橙谷さんから。

橙谷 全部僕じゃないですかそれ！

赤宮 いいんだよ！ 雰囲気だよ雰囲気！ ほら！ 3位！

橙谷 じゃあ笑える話。略してワラバナ。はっはっは！ はいっ。

赤宮 番組違えんだよ！ いいから早く始めろよ！

橙谷 いやでも雰囲気です。……。

赤宮 このボードがあればいいんだよ。

そこへ緑山が来る。

緑山 お待たせしました。おい赤宮！

赤宮 何？

緑山 もうここに来んな。帰れ。

赤宮 は？

橙谷 緑山さん……。あつ！ そうか！ ここにルイさんがいたら昨日の危ない男がまた来るかもしれないからですね！

緑山 ……なんで知ってんの橙谷さん。

橙谷 あー……。いやこれは正夢！ いや違います。たまたま、戻ったらその偶然見ちゃったんですよ！

緑山 ふうん。

赤宮 危ない男？

緑山 ……トキさんが戻って来た。

赤宮 ああ……。そう。

緑山 だからここにいない方がいい。

赤宮 じゃあスズの話が面白かったら帰る。

橙谷 え？

緑山 何だよそれ。

赤宮 いいの。はいスズ！

橙谷 あっはい、なんかすいません。じゃっじゃあ、今日は中学時代の話を。略してチュウバナ。うーん青春！ つはい！

赤宮 やらねえよ。さつさと話せよ。

橙谷 あれは中2の歴史のテストだったんですけど……。『1582年、明智光秀が織田信長を襲撃した事件をなんとというか？』って問題で僕、漢字を間違えて『本能寺の恋』って書きちゃったんですよ。恋ですよ恋！ 明智光秀はホモで、信長のことを好きすぎて殺しちゃったみたいなの！

赤宮 おもしろくねえんだよ！

緑山 結構ありそうな話ですよ。

橙谷 いえ、でもね、この話には後日談がありまして、先生がテスト返却の時に皆にしゃべっちゃったんですよ。「おもしろい答えを書いたやつがいる。」って。事件はまさにそこから始まったんですよ。その時クラスで買った蛙がオダチャンって名前でした……。放課後、何人かの生徒に学校の裏の神社に呼び出されて、その蛙のオダチャンと一緒に柱に縛り付けられて、火つけられちゃったんですよ！

赤宮 それ死ぬじゃん。

緑山 いじめのレベル超えてない？

橙谷 そうなんですよ。しかもオダチャンはあんまりちゃんと縛られてなかつ

たから、炎がまわるにつれて、逃げ出しちゃったんですよ。本能寺の恋じゃなくて本能寺の失恋になっちゃったんですよ！

赤宮 笑えないからそれ！

緑山 で、無事だったんですか？

橙谷 それがなんと運のいいことに柱が先に燃えてくれまして、間一髪のところまで逃げ出すことができたんですよ。その日から僕のクラスでは、本能寺の変で、信長はじつは死んでなくて、何とか逃げ出したつてのが通説になりましてね。

赤宮 ……。

緑山 ……。

橙谷 あれっおもしろくなかったですか？

赤宮、時計を見る。

赤宮 面白かったつてことにしておく。でも今日だけだから。また来るから。

橙谷 えっ！ ルイさん。

赤宮去る。

緑山 あいつなんだかんだ言つてここで小説書いたことないですよ。

橙谷 ……そうですね。

緑山 どこで書いてるんですかね。

橙谷 ああつそー言えば！ 僕出来上がったものしか見たことないです！

緑山 あなた担当編集者ですよ？

橙谷 はははは。ああそうだこうしちゃいられない！ ルイさんをストーカーしなくては！

緑山 ストーカー？

橙谷 いや、何でもないです！ ホント何でもないですから！ じゃっ！

緑山 ちよつと！

橙谷慌てて去る。

緑山 お金……。まあいつか明日で。

緑山去る。音楽が鳴る。舞台前面にルイが現れる。左右に歩くルイ。それを追う猫耳をつけた橙谷。教会の鐘が鳴り、舞台は教会へ。

黄瀬が座っている。

橙谷 あれ？なんでここに。ここは僕が偶然見つけてルイさんを連れてきたスポットなのに……。

黄瀬 ほっほ。また来たね。

赤宮 黄瀬さん。どうしよう。私、ここでも書けなくなった。

黄瀬 ほっほ。そういえばあんたがここへ来てからもう少しで、5年になるね。だいぶ顔つきも大人っぽくなった。わしも歳をとったな。

赤宮 あんたは5年前と大して変ってねえよ。

黄瀬 ほっほ。しわが増えた。

赤宮 わかんねえよ。

黄瀬 あの日は雨が降っていた。教会の前であんたが倒れているを見た時は驚いたよ。

赤宮 トキの逮捕が思ったよりも衝撃だったんだ。私もいつか捕まるのかなあって思ったら、怖くなった。犯罪者の小説は認められない。だから、足を洗ったんだ。私のやりたいことは小説を書くことだから。

黄瀬 あんたは懺悔を繰り返したね、来る日も来る日も……この神様は猫だというのに、ほっほ。

赤宮 うるせえよ！ 黄瀬さんが言うまで知らなかったんだ。

黄瀬 ほっほ。

赤宮 でもここで書いた小説が、売れた時、私は救われた気がしたんだ。ここですら私は小説が書ける。書いてもいいんだって……。

黄瀬 ウチの猫もやる時はやるらしい。

赤宮 でもさ、書けなくなっちゃった……。何でだろう。いや、わかってたんだ。いくら神様に謝ったって過去は消えない。傷は消えない。痛みは消えない！ 一生残るんだよ。ねえ黄瀬さん！

黄瀬 ほっほ。確かに傷は消えない。わしもかつて大きな過ちを犯してしまったことはあった。幾ら謝っても、それは消えるわけではない。背負っていかねばならんことに変わりは無い。

赤宮 黄瀬さん、なんかあいつに似てる。

黄瀬 あいつ？

赤宮 私の担当。性格とかは全然違うけど、何だろう。一緒にいると癒される。橙谷 ルイさん。

赤宮 ……顔とかそういうことじゃなくて、すごくきれいなんだと思う。

黄瀬 あんたもきれいだぞ。わしが後、30歳若かったら放っておかんかった。赤宮 そういうことじゃねえって言ったろ。

黄瀬 そういうことじゃないぞ。

赤宮 色に例えるなら、あいつはオレンジで、黄瀬さんは黄色。おおらかな感じ。でも信号の黄色みたいに、危険性を少しはらんでる。

黄瀬 わしの危険性がわかるとは、なかなかやるな。

赤宮 トキが……戻って来たんだ。

黄瀬 ほう。

赤宮 5年前に、連れ戻されてしまいそうな気がする。

黄瀬 時間は逆流しない。

赤宮 なんて、何も浮かんでこないんだろう。良く考えるんだ。私の中の魅力ってなんだろうって。私の周りにいる奴は悔しいけどすごく魅力的に見える。大嫌いだけど、青森ユイも私にないものいっぱい持つてる。私スッピンでそんなに堂々とできない。

黄瀬 それは違う気が。

赤宮 私には魅力がない！もしかしたら2つの小説に「魅力」をおいてきちゃったのかもしれない。青森ユイの言う通りだよ！

黄瀬 もしかしたら彼女もまた、同じように感じているかもしれない。わしから見たらあんたはとても魅力的だ

赤宮 だから、違う意味にしか聞こえねえんだよ。（微笑）

黄瀬 ほっほ。わしは人に説教できる人間ではない。ただ、見守ることはできる。

赤宮 このエセ神父。

黄瀬 ほっほ。吸うか？（煙草を渡そうとする。）

赤宮 いや、今はいい。

黄瀬 ほっほ。（煙草に火をつけ吸おうとする。）

赤宮 黄瀬さんは何で毎日ここでたばこを吸うの？

黄瀬 ……弔いだよ。

赤宮 猫の？

黄瀬 いや、もちろん猫にもだが……。

赤宮 他にも死んだの？

黄瀬 ほっほ。

赤宮 私さ、両親がいなかったから施設に入ってたんだけど……。

黄瀬 ん？

赤宮 その頃、5歳くらいかな、に初めて本を書いたの。絵本だった。誰にも読ませるつもりなかったんだけど1人の男の子に読まれちゃった。私より年上の子。でもなんかよわっちそうだった。その子がさ、本読んで、私のことすごく気に入って。この本があれば僕は笑っていられるって。

黄瀬 それが作家を目指した理由かな？

赤宮 うん。でもね、その子。消えちゃった。ある日突然。

黄瀬 消えた？

赤宮 うん。死んじゃったって聞いた。ずっとその子の名前を思い出そうとしてたんだ。で、今思い出した。

黄瀬 名前は？

赤宮 ……スズ。何の偶然だろう。

黄瀬 ほっほ。

黄瀬、去る。パソコンの前で固まる赤宮。

橙谷 偶然じゃないですよ！ ルイさん。その男の子は僕ですよ！ 勝手に殺さないでくださいよ。施設から出て迷子になっただけですよ、もう！ それがきっかけで僕はルイさんのこと好きになったんですよ！ 声かけた方がいいかなあ。心配だなあ。ルイさんは十分魅力的なのに……。でも「何でここにいるの？」ってことになりますよねえ。それにずっと僕にここで小説書いてること言わなかったわけだから、やっぱり知られたくないと思うし……。今日はこれで帰ろう。……ルイさんの過去も少し垣間見れたし。……それにしても、僕はルイさんのこと、何にも知らないんですねえ。

橙谷、去ろうとする。

紫 待て！

橙谷 あっその声は、パープルさん。

紫、出て行く。

紫 次の分をもらって行かないのか？

橙谷 あー！……！忘れてました。

紫 こんな親切な神様、他にいないぞ。

橙谷 ありがとうございます。

紫 ……。(猫耳を渡す。)

橙谷 ……。(受け取る。)

紫 この間言ったが、猫耳は後1つ。これが最後だ。

橙谷 最後……。何かあつという間ですね。

紫 そうかもしれない。

橙谷 パープルさんともう会えないんですかね？

紫 ああ。短い間だったがなかなか楽しかった。

橙谷 ……あのっ！

紫 何だ？

橙谷 さっきの話だと、ルイさんはパープルさんに懺悔してたってことですよね？

紫 ああ。

橙谷 パープルさんの力でルイさんは売れたんですか？ だったらまた……。

紫 いや、私は何もしていない。乗り切るも、倒れるのも、ことごとく自力のもたらす結果である。ってな。私は何もしていない。

橙谷 あのっ。ルイさんがパープルさんに懺悔した内容を教えてもらえますか？

紫 やだ。

橙谷 僕、気付いたんです。ルイさんのこと何も知らないくせに、一方的に気持ち押しつけちゃって、後悔してるんですよ、告白してしまったことを。

紫 知らん。

橙谷 僕は、ルイさんの重荷になってしまったかもしれない。そう考えると。紫 のんきと見える人々も、心の底を叩いてみると、どこか悲しい音がする。

君もいろいろ考えてるんだな。

橙谷 お願いします！

紫 やだ。実地を踏んで鍛え上げない人間は、木偶の坊と同じことだ。

橙谷 パープルさん。

紫 チャンスは与えた。後は君次第。私はそれ以上のことはしない。

橙谷 ……そうですよね。僕が悪かったです。自分で動きます。

紫 その方が君らしい。

橙谷 ……僕、透明になって思ったことがあるんです。僕がやろうとしていることは透明じゃなくてもできるんじゃないかって。僕のすべきことはルイさんとまっすぐ向き合うことなんじゃないかって。

紫 ……私は余計な事をしたかな？

橙谷 いえ、パープルさんがいなかったら、この猫耳が無かったら、絶対に気づけないことでした。パープルさんに出会えてよかったです。本当にありがとうございました。

紫 そうか。

橙谷 では、僕はこれで……。

紫 ……もし

橙谷 え？

紫 もしどうしても、もう一度命を懸けてでも猫耳が欲しくなったら、その時はまた来たまえ。

橙谷 え？ これで最後じゃないんですか？

紫 ……最後だ。安全なのはこれが最後。だからどうしてもこの時だけだ。

橙谷 それは……。

紫 理由は言えん。これで最後になるならそれに越したことは無い。

橙谷 ……パープルさんが何を心配しているのかよくわからないですけど、大丈夫ですよ！ 任せてください。

紫 智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくいってな。頑張りたまえ。私は君を応援している。

役者静止。鐘が鳴る。

明転。

役者移動。舞台は再び、喫茶店へ。

赤宮 スズ橙谷のすべらない話！

橙谷 今日はそれですか！

赤宮 早くしろよ！

橙谷 すべらないも面白いもおんなじなんです。もつとジャンルに幅をくださいよ。

赤宮 うるさい。書かないよ。あんた担当編集者でしょう？ 私が書かないとまずいんですよ？

橙谷 はあ、まあ。

赤宮 だったらやりなさいよ。

橙谷 じゃあ今日は……

緑山 ストップ。

緑山 入って来る。

赤宮 何？

緑山 いい加減にしろ！ もう来るな。

赤宮 無理。

緑山 トキさんきつとまたお前のこと使って仕事するつもりだよ。お前もうれつきとした小説家なんだぞ？

赤宮 わかってるよ。

緑山 この町を離れる。

赤宮 え？

緑山 この町から出て行くんだ。さすがにそこまではあの人も追って来ない。

赤宮 無理だよ。

緑山 無理じゃないよ。

赤宮 無理なんだ。逃げられないんだ。あいつからは。

緑山 ……。

赤宮 私はこの町を離れない。

橙谷 何ですか？

緑山 ……。

赤宮 無理。

緑山 ……。

そこに青森ユイが入ってくる。お菓子を持っている。

橙谷 あ。ユイさん。

青森 今日は別に何かを食べに来たわけじゃないんです。一言、ルイさんに言いたいことがあります。

橙谷 僕に電話くれたら伝えておきましたのに。

青森 いえ、直接お話したかったので。

赤宮 何？

青森 一昨日話した賭けですけど、発表が明日なのでそのことをお知らせに。後もう1つ、条件を少し変えさせてください。

赤宮 何？

青森 もし私が苗木賞をとったら、橙谷さんを解放して、この町から出て行つて下さい。

赤宮 は？

青森 だから、この町から出て行つて下さい。

赤宮 何言ってるのあんた。

青森 失礼ですけどあなたと藍川トキの関係について調べさせてもらいました。びっくりしましたよ、あなたの過去にそんなことがあったなんて。そんなことがマスコミに知れたら困りますよねえ。

赤宮 ！

橙谷 ちょっとユイさん！

青森 橙谷さんはちょっと黙って下さい。

緑山 青森、何か焦ってない？

青森 焦ってません！ さあルイさん！ 条件をのみますか？ 賭けに乗りま

すか？

赤宮 ……。ああ、わかったよ。

橙谷 ルイさん！

緑山 赤宮？

赤宮 だからとりあえずその賭けが終わるまでは私はここにいるから。

緑山 赤宮……。

青森 じゃあそういうことで。失礼します。来週をお楽しみに。

出て行こうとする青森の前に藍川が現れる。

藍川 どけ！

藍川、青森を突き飛ばす。

緑山 ちよっとトキさん！

青森 うわあ死ねばいいのに……デス！

橙谷 もうデスの意味が変わっちゃってますよ！

藍川 よお久しぶりだなルイ！

がたがた震えだすルイ。

藍川 見ない間に随分と売れっ子になっちまったみたいだな。

藍川、赤宮に顔を近づける。

藍川 戻ってこいよ。俺のところに。

赤宮 私は……。

藍川 お前じゃなきゃダメなんだよ。俺は気付いたんだ。俺はもうお前じゃ無いとイケない。他のやつじゃ快感が足りねえんだよ。

赤宮 そんなこと、私には関係ない。

藍川 ああ？ ペットはご主人様の命令に絶対服従だろうが！ 忘れちゃったのか！ 忘れちゃったってんなら思い出させてやるよ！ おら！

藍川、ルイの服を脱がそうとする。止めに入る橙谷と緑川。

橙谷 ちよっとやめましょうよそういうことは！

緑山 あんた調子乗るんじゃないぞ！

藍川、二人を振り払う。

藍川 てめえらこそ調子に乗るんじゃないぞ。てめえらの物差しで俺とルイの関係を測るんじゃないよ！

緑山 トキさん、あんたにはお世話になったけど、赤宮に関しては譲れねえ！止める！

緑山、ナイフを取り出す。止める橙谷。

橙谷 それはダメです！ 緑山さん！

緑山 放して下さい！

青森 殺せ殺せ。

藍川 たかが詐欺師が偉そうに。

レン、再びルイの服を脱がそうとする。ルイの背中があらわになる。
そこには刺青が彫ってある。

橙谷 それは……。

藍川 なあ戻ってこいよ。

赤宮の刺青をなめる藍川。

藍川 お前のことは俺が一番わかってる。どこをどうされるのが好きか。どこが一番感じるか。

赤宮 やめて。

藍川 お前はいつもそういうが、本当は喜んでるんだろ？ 俺にはわかるぜ？ 変わってねえなあお前も。

藍川、赤宮の刺青をなめ終え、そのままキスしようとする。
抵抗するルイ。

そこに黄瀬がいきなり現れ、レンを蹴り飛ばす。

黄瀬 ほっほっほほほ。正義の味方参上ってな！ どう？ 惚れた？ ルイちゃん惚れた？

橙谷 ルイさん！（橙谷、赤宮に駆け寄り服を着せる。）

赤宮 黄瀬さん……。

藍川 てめえは？

黄瀬 わしか？ わしは……ルイちゃん親衛隊、1号、黄瀬ショウだ！

藍川 殺されてえのか！

起き上った藍川をすぐさま、緑山が殴り飛ばす。

緑山 同じくルイちゃん親衛隊、0号、緑山レンだ。

橙谷 緑山さん！

黄瀬 あああああああああああ！ いいところだああああ！ ずっとするいぞあんた、しかも0号って何だ！ わしの後に出てきたんだからそこは2号だろ……！

緑山 説明しよう。ルイちゃん親衛隊は番号が若いほどいい男なのだ！

黄瀬 じゃあわしはマイナス1号だ！

橙谷 それもうどうでもいいですから！

藍川 ふざけやがって。

緑山 さしずめあんたは、悪の軍団シヨツカーの中ボスってところだな！

黄瀬 怪人マユナシハゲロン！（アドリブで見た目に関する悪口）

藍川 てめえらまじで殺すぞ。何度も言わせんな。俺とルイの関係はてめえらが思ってるほどぬるくない。ルイ！ 戻ってこい。お前は俺の籠の中でしか生きられねえんだよ！

赤宮 ……。

藍川 答えろ！ ルイ！

赤宮 ……。

藍川、ずかずかと赤宮の元へ行き、髪のを引っ張り顔を持ちあげる。

藍川 後で2人で会おう。場所は連絡する。お前はこの町を出ない。そしてまた俺の元へ来る。俺はお前のことを誰よりもよくわかってる。それだけは覚えておけ。

藍川、出て行こうとする。

青森 それはどうですかねえ。もしかしたらルイさんあなたの元からいなくな

ってしまいかもしれませんよ。

藍川 お前か……。気の強い女だ。嫌いじゃないぜ。

藍川、名刺を青森に渡す。

藍川 調教されなくなったらいつでも来い。相手してやるから。

青森、受け取ってすぐ名刺を破る。藍川、青森の口を押さえる。

藍川 俺の前じゃあそういう行動は控えとけ。な？

藍川、出て行く。

青森 なんで殺さなかったんですか。

黄瀬 いやあ聞いてた通り怖いねえ。

赤宮 黄瀬さん。何で？

黄瀬 まあなんだ。たまたまこの店の前を通りすぎてな。

橙谷 神父さん。

黄瀬 やあ君か。スズ君だったな。

橙谷 どうも。

緑山 あなたは……。

黄瀬 とある教会の神父だ。

緑山 神父？　そうですか……。橙谷さん、神父さん、すいません。いつものんです。

橙谷 いつも？

緑山 俺もトキさんも赤宮のことになると歯止めがきかなくて……。5年前もこんなんしよっちゅうだったんです。

黄瀬 怖いねえ。

橙谷 ルイさん。この町を出ましょう。

赤宮 ……。

橙谷 ルイさん。

青森 どうせ私が苗木賞取ったら出て行くんですから、そんなに焦んなくても大丈夫ですよ。

赤宮 ……無理。書けない。ここじゃなきや書けない。

赤宮のケータイが鳴る。赤宮、メールを見る。

赤宮 ……行かなきゃ。

緑山 おいっ！

橙谷 ルイさん！

赤宮 来るな！

橙谷 でもルイさん！

赤宮 うるさいんだよ。私がどうしようとスズには関係ないだろ？

橙谷 確かに関係ないかもしれませんが。でも関係ないなんてなんか寂しいじゃないですか？

赤宮 はあ？

橙谷 僕決めたんです。ルイさんとまっすぐ向き合おうって。

赤宮 もうおしまいなんだよ！

橙谷 終わってないですよ。これからじゃないですか？諦めたらダメですよ！僕も支えになりますから！

赤宮 スズ……。

橙谷 ルイさん。

赤宮 ありがと。……さよなら。

橙谷 ルイさん！

赤宮 来たら許さない！

赤宮出て行く。去り際。

赤宮 書けなくなった途端に現れやがって……ファック。

続いて青森が出て行く。

橙谷 すいません。僕、行きます！

緑山 でも赤宮の選択です。

橙谷 そんなことは関係ないです！ 僕がそうしたいからそうするんです！
緑山 ……。

橙谷、出て行く。煙草に火をつける黄瀬。

緑山 禁煙です。

黄瀬 かたいこと言うなや。いいねえ若くて。

緑山 あなたも十分若いですよ。何ですかあの登場は。

黄瀬 ほっほ。そうそう、あんたがレン君だね。

緑山 どうして俺の名前……。

黄瀬 ルイちゃんから話をよく聞くんだ。

緑山 赤宮の知り合いですか。

黄瀬 ルイちゃんの行きつけの教会の神父ってどこだな。

緑山 そうですか。

黄瀬 あんたは色に例えると緑だってな。

緑山 緑……。

黄瀬 中世的でナチュラル。自然体。癒しを与える緑。

緑山 はあ。

黄瀬 気に食わんのか？

緑山 見せかけだけですよ。ある意味職業病ですかね。

黄瀬 職業病？

緑山 ……そういえばあなた神父さんなんですよ？

黄瀬 一応な。

緑山 じゃあ懺悔させてください。

黄瀬 懺悔？

緑山 気分の問題です。話聞いてくれればいいです。折角お店に来たんですからゆっくりしてってください。

黄瀬 ほっほ。

緑山 俺、昔詐欺師だったんですよ。女の人騙してはお金取ってました。まあこの店もそのお金でやってんですけど。

黄瀬 悔い改める気持ちはなさそうだな？

緑山 でも今は詐欺はやってませんよ。このお店だけです。

黄瀬 ほう。

緑山 詐欺をやった頃も楽しかったんですよ。トキさんに手ごろな女探してもらって、仲介してもらって、女騙して、ずっと遊んでました。赤宮と知り合ってから、とったお金は赤宮のために使おうって決めて……。

黄瀬 真面目に働けよ。

緑山 そうですよ。詐欺って楽だったんですよ。でもやめました。

黄瀬 なぜ？

緑山 俺、死ぬらしいです。

黄瀬 え？

緑山 病気なんです。うつされちゃったみたいで。

黄瀬 そんなにやばいのか？

緑山 俺知り合った女皆とSEXすることがポリシーなんですけど。できなく

なっちゃいました。

黄瀬 え？

緑山 うつしちゃいますから。うつしたら彼みたいになれますかね。

黄瀬 何の話だ？

緑山 いや、何でもないです。

黄瀬 ……そうか。

緑山 だから詐欺やめたんです。

黄瀬 君も背負っている人間なわけだ。

緑山 え？

黄瀬 いや。だが、なんでまた喫茶店を？

緑山 ほんと思いつきなんですけど。こういうところで喫茶店やっていると、まっすぐ人と向き合えるんじゃないかなって。

黄瀬 ほっほ。

緑山 後、赤宮には幸せになつてほしいんです。俺が唯一、愛した人間なんです。トキさんにはお世話になってますし、両親のいない俺や赤宮みたいな人間に仕事探してくれるんですから。本当はすごいいい人なのもわかってるんです。でも、赤宮は小説家でいたいんです。それはトキさんのところにいたらできない。

黄瀬 やっぱりあんたは「緑」だよ。

暗転。

舞台前面が明るくなる。音楽が鳴る。

猫耳をつけた橙谷が赤宮を追う。

橙谷 （追いながら）パープルさん。最後の猫耳、使わせていただきます。パープルさんは僕に他人を変える力があるって言うてくれましたけど、実際は自分の担当1人変えることもできません。……でも僕は、それでも僕はルイさんのためにできることがあるならしてあげたいんです！

赤宮の前に藍川が出て来る。

橙谷 えー！ー！ー！ホテル！ ホテルですか！ そうですか。止めなければこれは何としても止めなければ！ 他人に干渉する時は今！ 猫耳を外す時は今！ いざゆかん！

橙谷の後ろから青森が現れる。音楽が止む。

青森 橙谷さん！ 聞こえてますよね。橙谷さん！ そこにいるんでしょう！
橙谷 ぎゃーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！ なんて！ なん
で！ うわーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー。
青森 姿を見せてください！ あなたがそこにいるのはわかってるんです。
橙谷 えええええ！ ユイさん！ ええええ！
青森 橙谷さん。あなたに発信機を着けさせていただきました。
橙谷 ええええええええええええええええ。
青森 観念して姿を見せてください。

橙谷、猫耳をはずす。

青森 まさかとは思ってましたが、本当に透明になっているとは……。
橙谷 ……。
青森 その猫耳で消えるんですね？
橙谷 はい。

青森、猫耳を取り上げてつける。

橙谷 1回きりしか使えません。だから今ユイさん猫耳付けたかわいい女の子
です。

青森 ……。(橙谷を殴る。)

橙谷 いたいっ。……もしかして、この間、救急車呼ばれた日からばれてまし
た？

青森 いえ、怪しんだだけです。あの日の会話が独り言でなかったなら、橙谷
さんは何か神のようなものから力を与えられたことになります。

橙谷 わかるんですか？信じられますか？

青森 実際にあなたがこうやって消えていたのでは信じるしかないでしょう。
私はあの日からあなたの行動を疑い、今日こうやってあなたに発信機をつけ
て調べてみたら、発信機の表示されている場所にあなたはいない。では透明
になっているのでは。そう思っただけです。

橙谷 ユイさん。……観念しました。どうぞ警察に突き出して下さい。ただも
う少し！ ルイさんを救うまでは、見逃してもらえますか？ 僕は何として
もルイさんを苦しみから解放してあげたいんです！

青森 安心して下さい。そのつもりはありません。あなたの気持ちはわかりま
す。私も赤宮ルイをストーキングしてましたから。

橙谷 ありがとうございます。ってえーーーーー。

青森 私はストーリーカーのプロです。今も、藍川トキのホテルの部屋に盗聴器を仕掛けてきました。

橙谷 えーーーーー！

青森 さつきからうるさいです。私の方が色々驚く場面なんです。藍川トキの隣の部屋を取ったんでそっちに移動しましょう。

橙谷 あっはい。

以下、動きながら。

橙谷 すいません。でも何でルイさんの尾行を？ ユイさんはルイさんのこと嫌いだと思ってました。

青森、立ち止る。

青森 ……。

橙谷 何照れてるんですか？ 話して下さいよ！

青森 ゼッ絶対にばらさないでくださいよ。

橙谷 はい。もちろん。

青森 私、じつは、赤宮ルイに憧れて作家になったんです。

橙谷 えーーーーー！

青森 うるさいです。

橙谷 えつでも、じゃあなんであんなにボロクソ……。

青森 私は、5年前、赤宮ルイが時の人となっていた時に、テレビで彼女を知りました。私と同年でこんなにすごいものが書けるんだって、純粋に尊敬してたんです。

橙谷 あの頃のルイさんは輝いてましたからね。と言っても僕も知り合ったのその頃ですけど……。ってえーーーーー！ 同年！

青森 あ。

橙谷 どういうことですか？ ユイさんは今20歳。ルイさんは今24歳。4歳差ですよ！

青森 ……この際だから言います。ウソです。年齢詐称です。今年24歳です。これからも一緒にウソついて行きましょう橙谷さん。

橙谷 えーーーーー！ いやでも担当決まった時に、免許やらなんやら……。

青森 藍川に偽造してもらったんです。

橙谷 あの人そんなこともやってるんですか！

青森 はい。そのころから気に食わないやつでした。

橙谷 なんかさつきから僕驚きすぎでどうかなっちゃいそうです。

青森 ルイさんは当時19歳の新星、文学界の革命児として大々的に取り上げられていました。私もルイさんと同じようになりたかったんです。

橙谷 でも年齢詐称は。

青森 これからもよろしくお願いしますね。

橙谷 昔、年齢詐称で某アイドルがアッコさんにめっちゃ叩かれて泣かされてたじゃないですか。止めた方がいいですよ。

青森 私ならアッコさんを泣かします。

橙谷 いや、それは。

青森 でもようやくルイさんと同じ舞台に來たと思っていたら、愕然としました。書けなくなっていたなんて……。

橙谷 それで……。

青森 私はなんとしてもルイさんに次回作を書いてもらいます。そのためにこんなことしてるんですから！

橙谷 ユイさん……。前にユイさんがルイさんを赤に例えたことがありましたけど、ユイさんは青ですね。一見空のようにクールで理性的ですけど、時には海のごとく荒れ狂う。ぴったりだと思います。

青森 だったらなんなんですか？

橙谷 いや。

青森 行きますよ。

橙谷 あっはい。

再び進む。

青森 それよりも橙谷さんの能力です

橙谷 え？

青森 今、私達は同志になりました。私のストーリーキング技術と、橙谷さんの変な力で、ルイさんに次回作を書かせましょう。

橙谷 あ……それなんですけど。

青森 なんですか？

橙谷 僕、もうこの力使えないかもしれないですよ。

青森 うわあ使えねえです。何ですか？

橙谷 そう言われたんです。

青森 どうせこの力は3回しか使えないみたいなこと言われたんですね。

橙谷 おおっすごいですユイさん。そうなんですよ。

青森 3回できるなら4回、5回とできて当然です。その神様に殴りこみに行
って力を手に入れてきて下さい！

橙谷 確かに……。もう1回できるかもみたいに言っていました。でも命懸けっ
て言っていました。安全ではないみたいなの。

青森 じゃあやめればいいです。

橙谷 ……。

青森 とりあえず今は、ホテルの様子を探りましょう。橙谷さんこれつけてく
ださい。

橙谷 なんかストーカーって言うよりスパイみたいで恰好いいですね。

青森 良く言えばですね。

2人、盗聴器のイヤホンを着ける。藍川と赤宮は声のみ。

藍川 服脱げよ！

橙谷 うわあああああ始まっちゃいますよ！

青森 そんなことはどうでもいいんです。会話だけしっかり聞いていてくださ
い。

橙谷 いや、でも。これ犯罪的ですね。

青森 絶対ばれません。プロですから。

橙谷 でも、止めたくなっちゃいます。

青森 気持ちにはわかりませんが、我慢してください。この2人はもともとそう
いう関係なんです。やりまくりなんです。

橙谷 うわあやっぱり本当だったんだ。……てことはやっぱり同い年のユイさ
んもやりまくりなんですか？

青森、橙谷を殴る。うずくまる橙谷。静かに音楽が鳴る。

藍川 うわあお前細いなあ。

赤宮 トキ、初めての時もそう言った。覚えてる？

藍川 ああ。刺青の代金代わりだっけ？

赤宮 そ。

藍川 おらっ縛るぞ。

赤宮 あっ。

藍川 いいねその顔。すげえそそる。

赤宮 うるさい。

藍川　なあ、レンってどんなSEXすんの？
赤宮　……。
藍川　何だ？　言えないのか？
赤宮　……したことない。
藍川　は？　あのレンとだぞ？　世界の女を皆犯そうとしてるやつだぞ？
赤宮　うん。したことない。
藍川　……お前、いつからレンと付き合い始めたわけ？
赤宮　7年前。
藍川　……それだとつじつまが合わねえ。
赤宮　何が？
藍川　いや、こっちの話だ。欲求不満になんなかったのか？
赤宮　別に。そんなに性欲強くねえし。
藍川　俺はなるわ。
赤宮　トキの場合、普通のSEXでもなるでしょ。
藍川　正解。
赤宮　狂ったサディストだもん。
藍川　それも正解。
赤宮　色に例えるなら藍色、俗悪と高貴さが入り混じってる感じ。
藍川　何だそれは？
赤宮　最近、人を色に例えるのが流行ってるみたいだから。
藍川　そ。入れるよ。
赤宮　うん。

ベットのきしむ音。

藍川　お前、レンと別れたなら俺の女になれよ。
赤宮　トキの女になったら殺されそう。
藍川　それはレンも変わんねえだろ。
赤宮　……。
藍川　お前、知ってんだろ？
赤宮　何が？
藍川　レンの病気のこと。
赤宮　……うん。
藍川　レンのために別れたのか？
赤宮　あいつがそう仕組んで私はそれに乗ってあいつをふっただけ。あいつの
浮気なんか日常茶飯事だもん。別れる理由にならない。

藍川 お前まだ好きなのか？

赤宮 ……わかんない。

藍川 泣いてんの？ おらっもつと泣けよ。

橙谷 うわあああああああ！ もう我慢できません！ 行きますよ！

青森 だからダメですって！

橙谷 いや、無理です。もう行きます。

青森 ここで出て行って部屋に殴りこみに行ったら逮捕ですよ逮捕。

橙谷 構いません。行きます。僕1人でも。

青森 そういう問題じゃないです。

橙谷 放して下さい。僕は行くんだ。

青森 あっ、イッた。

橙谷 え？

青森 終わりました。もう意味ないですよ。

橙谷 ああ。

青森 もう止めるものではありません。

橙谷 ううう。つらかったよおおお。

青森 よしよし。

藍川、赤宮、中央に来る。青森、橙谷、奥に行く。

藍川 お前は俺を狂ったサディストだと言ったが、究極のサディストは神様だ
と思うぜ？ 人間に命を与えるなんて、な。

赤宮 ……そうかもね。

藍川 お前もそう思うだろ？ この傷が。この痛みが。生きてることを自身に
伝える。そう考えれば、人間皆マゾヒストだ。

赤宮 何が言いたいの？

藍川 逃げられねえよ？ この痛みからは。

赤宮 ……。

藍川 もう一度俺と仕事しねえか。

赤宮 ……しない。

藍川 諦めろよ。お前は俺と生きて行くしかないんだ。

赤宮 ……。

藍川 さっき偶然にも今回のターゲットと遭遇した。

赤宮 え？

藍川 俺の邪魔をした親父。黄瀬ショウだ。

赤宮 待って。止めて。

藍川 あいつは元々でかい会社の社長で、そこで稼いだ金で教会なんか作ってやがんだ。そしてあそこのどこかに金が隠されてる。

赤宮 何で？

藍川 脱税だ。所得隠しってやつだ。そいつを俺達が頂く。

赤宮 だめ。

藍川 黄瀬は悪人だぜ？ 不倫した女にできた子供を、その女が自殺したかなんかで、引き取ることになった時に、不倫の事実を金でもみ消し、その子を施設にぶち込んだんだ。

赤宮 うそ。黄瀬さんがそんなこと。

藍川 確かな筋の情報だ。しかもそれだけじゃ飽き足らず。その子を殺した。

赤宮 殺した……。

藍川 あの教会にはそうやってあいつに社会から抹消されたやつの死体が眠ってるって噂だぜ？ そんな悪人から金パクってもかまわねえだろ。お前があの親父から、金の場所を聞き出すんだ。そして後日忍び込み、金を頂く。いいな？

赤宮 でも……。

藍川 お前に拒否権は無い。どうせ書けなくなったんだろ？ じゃあ次の仕事を探さねえとダメじゃねえか。

赤宮 ……。

青森と橙谷が前に出る。音楽が止む。

橙谷 ユイさん！ 止めないと！ 犯罪者になっちゃいます。

青森 落ち着いてください。ルイさんはすでに犯罪者なんです。

橙谷 え？

青森 藍川を逮捕した刑事に聞きました。藍川はルイさんと緑山をかばって捕まったそうです。だから2人とも彼に頭が上がりません。

橙谷 じゃあどうすれば？

青森 警察沙汰にするわけにはいきません。つまりここで聞いたことを警察に話すこと等はルイさんの今後のために良くないです。

橙谷 じゃっじゃあどうすれば？

青森 説得で止められる相手には見えません。現行犯で止めます。

橙谷 そうか！ それならさすがの藍川さんも断念するってわけですね。さすがに連続で刑務所行きはいやですもんね。でも……危険じゃないですか？

青森 いけます。もし橙谷さんがもう1度猫耳を手に入れることができれば……。

橙谷 え？

青森 ぎりぎりまでばれないんです。 いけます。 橙谷さん何とかしてもう一個手に入れてください。 安全がどうか言ってましたけど、猫耳を手に入れる前の橙谷さんを思い出して下さい。 いっただって命懸けだったじゃないですか。 だからルイさんの担当編集者にまでなれたんですよ。

橙谷 ……わかりました。 そうですよ。 僕らしくなかったです。 ルイさんの危機です。 なんとかします。 僕はもしかしたらこのために猫耳を授かったのかもしれないです。

青森 それでこそ橙谷さんです。 決行がいつか、私が2人をストーキングして聞き出しておきます。 橙谷さんは決行の日まで、猫耳をとっておいてください。 い。

橙谷 了解です！ 決行の日は僕が頑張りますんでよろしくお願いします。

青森 でも1つ問題が……。

橙谷 何ですか？

青森 明日私の小説がもし苗木賞に選ばれてしまうと、そんな暇が無くなってしまふんです。

橙谷 あっ……。

青森 もうこうなってしまうた以上、ルイさんとの賭けに私が勝っても、計画を話した藍川がみすみす見逃すとも思えないですし……。

橙谷 任せてください。

青森 え？

橙谷 僕が何とかします。

青森 どうやるんですか？

橙谷 作家に連絡がつかないことにして、僕が処理します。

青森 でも橙谷さんに責任が……。

橙谷 僕なら大丈夫です。 元々編集社のお荷物なんで。

青森 橙谷さん。

橙谷 はい。

青森 てめえのつら見て恰好つけろ、です。

橙谷 ぐさー……っ！

役者静止。 鐘が鳴る。

明転。 役者移動。

舞台は教会に。 黄瀬と緑山がいる。

黄瀬は煙草をくわえている。

黄瀬 いやあわざわざ呼び出してすまない。

緑山 いいですよ。昨日は長いこと店にいてもらったんで。どうしたんですか？

黄瀬 ほっほ。あんたにはわしと似たものを感じてな。

緑山 似たもの？

黄瀬 わしもあんたと似たような理由でこの教会を営んでいる。

緑山 死ぬんですか？

黄瀬 チがーう！ わしはまだまだ生きる！ ただ、人のために生きようと決めたんだ。

緑山 俺のはそんなに大それたもんじゃないですよ。

黄瀬 わしのもそんなもんだ。そんなあんただからこそ頼みたいことがある。

緑山 何ですか？

黄瀬 ボディガードをやってくれないか？

緑山 はい？

黄瀬 わしは君の知り合いの藍川トキに狙われているんだ。

緑山 まさか。

黄瀬 本当なんだ。藍川はわしの金を取る算段をつけていた。この教会の見取り図やらを入手していたんだ。

緑山 どうやって聞いたんですか？

黄瀬 ……。

緑山 信じられませんよ、いきなりそんなこと言われても。

黄瀬 ……わしも裏の世界に顔が利く人間なんだ。

緑山 え？

黄瀬 わしは自力で金を守るすべがない。

緑山 金の場所を変えたり警察に頼んだりすればいいじゃないですか？

黄瀬 そうじゃないんだ。それではルイちゃんを救えない。

緑山 話についていけない。

黄瀬 おそらく、藍川トキはルイちゃんにこの仕事をやらせるつもりだ。

緑山 え？

黄瀬 わしは金の場所をルイちゃんに話したことがある。自慢交じりに。

緑山 え？

黄瀬 聞いて驚け、この十字架の中が金庫になっているんだ。

緑山 なんて大胆な……。映画じゃあるまいし。

黄瀬 恰好いいだろう？ それでルイちゃんに自慢してしまった。ほっほ。

緑山 ほっほじゃないですよ！ もしそれが本当なら止めさせないと。

黄瀬 どうやって？

緑山 そうか、警察にも言えないし、説得も聞く相手じゃないってことですね。

黄瀬 そういうこと。

緑山 でも狙ってる相手が知ってることを話せば、さすがのトキさんも。

黄瀬 ああ止まるだろう。この犯罪はな！

緑山 ……それじゃ根本的な解決にならないってことですね。

黄瀬 そういふことだ。

緑山 張り込みですか。

黄瀬 ああ。現行犯で取り押さえ、取引する。ルイちゃんを解放するか、逮捕されるかの2択だ。ほっほ。

緑山 ……わかりました。協力しましょう。

黄瀬 信じてくれるのか？

緑山 ほっほ。ウソついて得する話じゃないんでね。それに俺はトキさんも止めてあげたい。

黄瀬 ありがたい。

緑山 神様の前でウソはつけないでしょう？

黄瀬 ほっほ。残念ながら神様ではなく猫様だよ。

緑山 はい？

黄瀬 ここは昔飼っていた猫のために建てた教会だ。

緑山 猫のための教会？ お墓じゃなくてですか？

黄瀬 ああ。猫の名前はスズ。わしがかつて過ちを犯し、捨ててしまった子の名前だ。

緑山 スズ……。スズって珍しい名前ですよね？

黄瀬 そうだな。

緑山 あの、もしかして。

黄瀬 そんなはずは無い。そんなはずは無いんだ。わしは殺したんだ。わが子を。そして埋めた。この教会に。

緑山 え？

黄瀬 わしは今までに4人の命を奪った。4番目に奪った命がスズ。この教会は元々4人の弔いのために建てたんだ。

緑山 じゃあスズさんはもう亡くなって……。

黄瀬 ああ。そして猫を飼った。しかしすぐにその猫も死んだ。わしには命を育てる権利は無いのかもしれない。

緑山 でも、なんかわからないですけど、スズさんって雰囲気は黄瀬さんに似ている気が……。

黄瀬 わしも一瞬息子かも知れんと思った。死んだはずの息子が帰って来たと。埋めたのは別の誰かだったのではないかと。だがそうだったとして今更、父親だと名乗り出る資格が私にあるとは思えない。私はひどいことをした、し

てきた。そしてそれらはわしが生きて行く以上、背負っていかねばならん傷なのだ。

緑山 ……そうですか。橙谷さんなら、あなたを受け入れてくれると思いますけどね。とても……面白い人だから。あなたに協力しようって思ったのは彼のおかげかもしれないです。

黄瀬 え？

緑山 自分の思いを行動にするって難しいですよね。でも、あの人はそれを簡単にやっちゃうんですねえ。それも楽しそうに、いつも笑顔で。そんな橙谷さんを見て思ったんです。僕も、譲れない思いがそこにあるなら、周りを気にせず行動しようって。いい息子さんをお持ちになられたと思いますよ。

黄瀬 ほっほっほっほ。 (黄瀬に背を向ける。)

役者は静止。鐘がなり、橙谷が出てきて紙をめくる。

「虹色ストーカー」

○虹色ストーカー

音楽が鳴り、全員出て来る。

各役者にスポットがあたり、1日の出来事が連なる。

橙谷 ユイさん！ おめでとうございます！ 苗木賞受賞です！ 後は僕にお任せ下さい！

赤宮 書けなかったら終りなんだよ！ 私はもう作家じゃない！

黄瀬 よいか、わしは普段通りを装って部屋にいる。

藍川 いいな。決行は明日だ。明日、黄瀬の金を盗む！

緑山 じゃあ俺はこの十字架の後ろに隠れます！

青森 橙谷さん！ わかりました。明日です！ 決行は明日の深夜です！

赤宮 わかった。やるよ。どうせ傷は消えないんだ。

黄瀬 ルイちゃんを救うんだ。

藍川 俺さ。刑務所で1番思ったことがあるんだ。

緑山 2人を救いましょう！

赤宮 何？

橙谷 じゃあ猫耳して決行の1時間前に集合しましょう！ ルイさんを救うん

です！

藍川 あそこは人の罪を消すところではねえってさ。罪は消えない。刺青と同じように。

青森 ルイさんに次回作を書かせるためなら私は何でもしますよ。

緑山 賭けをしませんか？

赤宮 そうかもしれない。私は逃げられない。刑務所に行かなくても、罪は、傷は痛みを残していく。

橙谷 保留の理由とかもうどうでもいいです！ 僕はルイさんが好きなんです！ その気持ちだけあれば何だってできます！

黄瀬 何を賭けるんだ？

青森 困るんですよ！ 私のライバルは真っ赤な情熱を持った人じゃないと！ ルイさんじゃないと！

緑山 明日うまく行ったら、橙谷さんに父親だって打ち明けてみましょう。違ったら違ったでいいじゃないですか？

藍川 人は1人じゃ生きられないってそういうことだな。傷をなめ合う相手がいるんだ。

橙谷 さあ行きましょう！

橙谷、走って十字架の前へ。音楽が止む。他の役者は祈りのポーズ。

橙谷 パープルパープルプルルル！

紫 やらなくてもいいのに。

橙谷 気に入ったんで。

紫 ……来てしまったか。

橙谷 パープルさん。命懸けでも安全性がなくてもかまいません。もう一度猫耳をください！ 今度はどうしても透明じゃないとダメなんです！ 透明じゃないとルイさんを救えないんです！ お願いします！

紫 カツオブシ。

橙谷 え？

紫 持っているだろ？においでわかる。

橙谷 あっ！（渡す。）

紫 勝負事と言うことかな？

橙谷 はい！ 勝負です！ ルイさんの傷を癒してあげたいんです。今ならまだ間に合うんです！ パープルさん言ってたじゃないですか。僕は橙だって、周りを癒す力があるって！

紫 落ち着きたまえ。少し、話をしよう。

橙谷 話？

紫 吾輩は猫である。

橙谷 知ってます。

紫 だが同時に人間でもある。

橙谷 え？

紫 この教会には、4人の人間のと1匹の猫の死体が埋葬されている。

橙谷 人間も……埋まってるんですか？

紫 そうだ。黄瀬という男の犠牲者の弔いのためにこの教会はある。彼は毎日ここで煙草を吸って、死者を悼んでいる。

橙谷 神父さんって一体……。

紫 まあ私のご主人様についてはいずれ彼自ら話す日が来るだろう。

橙谷 そう……ですか。

紫 幸福な王子の話を知っているか？

橙谷 え？ あっはい。知ってます。これでも一応文学に携わる人間ですからね。自我を持った王子の像が自分の装飾品とかをツバメに託して貧しい人々を助けて、最後は2人とも死んでしまうっていう自己犠牲の話ですよ？

紫 そう。それと一緒だ。私の力、つまり猫耳は死体の数しか使えない。猫耳が無くなれば私は消える。

橙谷 そんな……。じゃあ僕は今まで……。

紫 気にせずとも良い。そのための力だ。

橙谷 でも……。

紫 そして死体は後1つ残っている。

橙谷 そうですよ……でも何でそれだけ命懸けなんですか？

紫 いいか。落ち着いて聞いてくれたまえ。

橙谷 ……はい。

紫 君なんだ。（音楽が鳴る。）

橙谷 え？

紫 4人のうち1人は君なんだよ橙谷スズ。

橙谷 え？ どういうことですか？

紫 君は死人なんだ。本来ここに埋まっている人間なんだよ。

橙谷 ……うそですよー。やだなあ、最後にこうやって怖がらせるのやめてくださいよ。僕は現にここにいないじゃないですか。

紫 ……。これは仮説にすぎないが、君が赤宮ルイを思う気持ちが、肉体が滅びてもなお君に「生」を与えたのだろう。

橙谷 そんな……あれ？でもルイさんも僕が死んだみたいなこと言ってたし。

紫 あの時君は死んでいる人間なんだ。

橙谷 ……本当なんですね。

紫 受け入れるのに時間がかかるかもしれないが、

橙谷 信じますよ。信じるか信じないかは僕次第。でもパープルさんの言うことはずつと真実でしたから……そっか。僕、死んでるんですね……。

紫 君は幸福の王子であり同時にツバメなのだ。

橙谷 そうですか……。

紫 君がもしこの最後の猫耳を使い、いや、最後の猫耳を使わずとも、赤宮ルイへ思いが成就した瞬間に君は消えてしまうかもしれない。

橙谷 そんな……。

紫 しかし、君がこのまま何もせずに、赤宮ルイが、悩み続け、君への答えが出せずにいれば、君は消えずに済むかもしれない。

橙谷 保留じゃなかったら僕消えてたってことですよ（笑う）そういうことはもつと早く言つて下さいよお！

紫 すまない。私もどうすればいいのかわからなかったんだ。君が告白をし「保留」になった後、赤宮ルイを君の手で救うのが君のためになるのか、このまま何もせずにいるのが君のためになるのか……。

橙谷 ……パープルさん、猫耳下さい。僕、行かないけません。ユイさんとも約束しましたし。

紫 君……。

橙谷 僕って究極のストーカーだと思うんですよ。死んじゃってもまだルイさんの後を付きまとおうとするんですから。でもよかったです。ルイさんで僕ルイさんのためだったら消えてもいいです。ルイさんが最初に書いた絵本。あれがなかったら僕は一生を笑顔なしで送ることになってたかもしれない。だから僕はルイさんのために生きます。

紫 健闘を祈る。（猫耳を渡す。）

橙谷 ……パープルさんは色に例えると、名前の通り紫です。ミステリアスで神聖です。ルイさんは赤。僕は橙。黄瀬さんは黄色。緑山さんは緑。ユイさんは青。藍川さんは藍。そしてパープルさんは紫で猫です。

紫 何だ急に？

橙谷 七色です。虹色ですよ。

紫 虹色？

橙谷 猫は雨を呼ぶんです。そして雨の降った後、太陽が光り輝けばそこに虹ができるんです。僕のこと太陽だって言っただじゃないですか。見せてあげますよ！ きれいな虹を。

紫 ……楽しみにしている。ほれ。（カツオブシを返す。）

橙谷 え？

紫 明日君が持つて行きたまえ。勝つ。男。武士で縁起がいいんだろ？

橙谷 はいっ！

紫 後、これだ。（猫耳を渡す。）

橙谷 これは……。

紫 私の分だ。受け取りたまえ。

橙谷 でも……。

紫 君が赤宮ルイのために存在しているように、この教会で私達は君のために存在しているんだ。使ってくれ。

橙谷 ……はい。（受け取る）

紫 じゃあな。橙谷スズ。

橙谷 絶対に！ 絶対に虹を見せますから！

教会の鐘が鳴り響く。

暗転。

翌日の教会。耳をつけた橙谷と青森が現れる。雨の音がする。

青森 変わったところがありましたか？

橙谷 はいっ！ 十字架の裏に緑山さんがいました。

青森 なんだだよ！ です。

橙谷 じゃあちよつと聞いてきますね！ って僕透明じゃねえか！ 聞こえねえよ！

青森 十字架の裏ってことは、緑山さんも今日のことを知ってるんですかね。

橙谷 そんなはずないと思いますけど。じゃあちよつと聞いてみますね！ って僕透明じゃねえか！

青森 まあ敵になることは無いでしょうからうまく対応しましょう。

橙谷 うまく対応。そうですね。じゃあ前もって緑山さんと相談しておきましょう。って僕透明じゃねえか！

青森 なんなんですか鬱陶しい。緊張してるんですか？

橙谷 はい。人並み以上に。そりゃ緊張しますよ。最後の使命ってやつですから！

青森 最後の使命？

橙谷 僕は究極のストーカーです。

青森 は？ です。

橙谷 この命をかけてルイさんを救います。

青森、橙谷をどつく。

橙谷　いったつい！　何するんですか！

青森　緊張が解けるかなと思ってまして。

橙谷　解けませんよこんなじゃ。僕は旧型のテレビですか！　叩かれたら治るみたいなの……。

青森　来ました！

赤宮が現れる。

橙谷　え？　ルイさん1人ですよ。

青森　なんですかね。藍川トキの性格からしてルイさん1人にやらせることは無いと思うんですけど。

橙谷　ですよねえ。

赤宮その場に座り込む。

橙谷　あれ？　どうしたんですかね？

青森　ずいぶん思いつめてますね。死ぬんじゃないですか？

橙谷　物騒なこと言わないでくださいよ！

青森　冗談で言ったんじゃないです。

橙谷　え？

青森　来ますよ。

橙谷　え？

藍川が現れる。

藍川　早いじゃねえか。

赤宮　トキが遅いんだよ。

藍川　金庫のカギは？

赤宮　黄瀬からすった。はいっ！（投げる。）

藍川　どこ投げてんだよ。俺は犬か！

赤宮　たまには。

藍川　ふん。

藍川、カギを拾いに行く。

赤宮　ねえ。

藍川　ん？

赤宮　私達って結局これでしか生きていけないんだよね。

藍川　ああ。そうだな。お前の手首と一緒に。

赤宮　そ。

藍川　何だよ？

赤宮　別に。

藍川　金庫はあの十字架でいいんだな。

赤宮　うん。

藍川　黄瀬は寝てたか？

赤宮　うん。

藍川　しかし良くこんなところに隠したな。教会は解放しっぱなしだから盗んでくлетて言ってるようなもんだぜ。

赤宮　うん。

藍川、金庫に向かう。

青森　藍川が金庫に触れたら1、2の3で2人を押さえつけますよ。

橙谷　はいっ。僕が藍川さんで、ユイさんがルイさんです。

青森・橙谷　1。

青森・橙谷　2の。

赤宮がナイフを藍川に突き付け突進する。

青森　橙谷さん！

橙谷　ルイさん！

緑山　トキさん！

橙谷は赤宮を押さえ、藍川は緑山に突き飛ばされる。

青森、ナイフを奪う。

赤宮　スズ？

藍川　何だこれは？

緑山　橙谷さん！　青森！　えっ今。突然……。

藍川　ルイてめえ！

赤宮　放して！　放せ！　もう何もしねえよ！

橙谷、赤宮を放す。音楽。

赤宮 なんなんだよ……。

藍川 ……何でだ。どうしてだルイ。

赤宮 私も、死ぬつもりだった。

藍川 ルイ……。

緑山 赤宮。

橙谷 ルイさん。

藍川 レン、放してくれ。今更何もする気になんねえ。

緑山 あっはい。

赤宮 何だよ。何でもみんな来たの！ 何しに来たのよ！ 黙って死なせてよ！

青森 ナマ言つてんじゃねえよ、です。

赤宮 何？ あんたにとって私は邪魔なだけでしょ！ 死んだ方がいいじゃない！

橙谷 ルイさん！ ユイさんはあなたに……。

青森 そうです。とっても邪魔です。とっても目障りな赤！ 炎の赤！ まるで虫にでもなった気分。その魅力に吸い寄せられて虫達は炎の中に飛び込む。でも虫は飛び込んだ瞬間に気づくの！ ああ、ここは自分なんかが入って行つていい領域じゃないんだ。そして絶望する。自分が飛び込んだのは光じゃないんだって。そして焼け死んでいくんです。……あんまりがっかりさせないでください赤宮ルイさん。

赤宮 何？ 何が言いたいのか！

黄瀬 ほっほ。

黄瀬、入って来る。

藍川 てめえも知ってたのか。どうなつてんだこりや。（肩を落とす。）

橙谷 神父さん。

黄瀬 ルイちゃん。皆がここに集まったのは君の魅力に魅かれてのことだ。さて、ルイちゃんは彼女の言うように炎で終わるのか、それとも光になれるのか。

赤宮 うるさいんだよ！

緑山 俺さー。知ってたんだよ。

赤宮 何？

緑山 お前が毎日喫茶店に来るわけ。……俺に会いに来てたんだろ？

赤宮 は？ そんなわけ、

緑山 お前知ってんだろ？ 俺の病気のこと。

赤宮 ……。

藍川 知ってるぜ。ルイは知ってる。

緑山 俺の死にゆく様を見守ってくれてるつもりか？ 余計なお世話だよ！ 確かに俺の目標である「知り合った女皆とSEXする。」ってのは叶わなくなっただけさ。また目標できたから。目標があるうちは俺は死なない。俺はさ、あの喫茶店を繁盛させる。俺のコーヒーを美味いって言って笑顔で皆が来てくれるような店にする。それまで俺は死なねえ。死んでやらねえ。まずは青森に美味いって言わせるところからだ。

青森 緑山さん死ねませんね。

緑山 おうおう明日にでも死んでやるよ。

橙谷 そのブラックジョークやめましょう？ 心臓に悪いです。

黄瀬 ルイちゃん。確かに傷は消えねえし、痛みも残る。背負ってかなきゃならないもんだ。でもさ人生ってそういうもんだろう？ 誰もが自分の人生を背負ってる。人の命ってのはタバコみたいなもんだ。あっさり煙になって消えちまう。そいつを背負うってことは煙を肺まで呑み込んでやるってことだ。そうやって黒くなっていった肺が人生の軌跡なんじゃないか？ あんたは十分懺悔した。後悔もした。過去を背負うのは結構。だが、続きを吸ってやらんとタバコは美味しくないぞ？ 灰になったタバコを舐めても苦いだけだ。

橙谷 ルイさん。

赤宮 その通りだよ！ そんなことはとっくにわかってるんだよ。トキが戻って来たって時間が戻るわけじゃない。タバコの先を吸わなきゃいけないのはわかってんだよ！ でも書けないんだ！ おしまいなんだよ！ 書けなきゃ作家じゃないんだよ！

橙谷 ルイさん……。いいんですよ書けなくても。やりたいことは小説だって言ってたじゃないですか！ 書けなくても。書きたかったら作家ですよ。進むべき道は見えてるじゃないですか！ 進みましようよ。僕はルイさんを応援し続けます。だって僕は赤宮ルイの初めての読者ですから！ ルイさんの絵本を読んだのは僕なんですよ、ルイさん。ルイさんのために僕はルイさんを追い続けてきたんです。いろんなボーダーラインをぶちぎって来たんです。担当編集者にまでなったんです。自分のやりたいことやってください。道は見えてるじゃないですか？ こんなにも大勢の人がルイさんのために動いてるじゃないですか。ルイさん。ルイさんは作家です！ 苦労したっていいじゃないですか！ 怒鳴り散らしたっていいじゃないですか！ どんなに険しい道のりでも最後は笑って来たじゃないですか！ 周りを笑顔にしてく

たじやないですか！ だから、だから僕はそんなルイさんが大好きなんです。本当に！ 世界の誰よりも、いや、天国とか地獄とか宇宙とかそーゆーの全部ひつくるめた誰よりも！ 僕はルイさんを愛しているんです！

赤宮 ……。

橙谷 ルイさん。

緑山 赤宮。

青森 ルイさん。

黄瀬 ルイちゃん。

赤宮 ……うるさいんだよ。皆していちいち言うことがくせえんだよ。こんな状況じゃ書くつて言うしかねえじゃんかよ……。

赤宮泣く。（長め。） 藍川出て行こうとする。

青森がナイフを振りかぶる。

青森 逃げんじゃねえ！です。

藍川 あぶねっ。

青森 死ぬのです。お前はここで死ぬのです。

緑山 トキさん。俺たちはあなたにも……。

藍川 傷つてのは消えねえが癒すことはできるみてえだ。勉強になったよ。

橙谷 藍川さん。

藍川 ルイを頼んだぜ、担当編集者さん。

橙谷 は……はい。

藍川 よかったなあ黄瀬。警察沙汰にならなくて。脱税した金じゃあ盗まれずとも、取り上げられちゃう。

黄瀬 ほっほ。

緑山 トキさん。俺、また店に流しますよ。ステイビーワンダー。

藍川 ほう。

緑山 彼は1回交通事故に遭って、味覚と嗅覚まで無くしてるんです。でも乗り越えたんです。乗り越えたんですよトキさん。

藍川 解釈論だな。まあ絶望に打ちひしがれるよりや、無理してでもそうやって笑えりゃあ幾分かましか。

緑山 トキさん……。

藍川 おまえ達の吸ってるのはタバコのようなだが、あいにく俺の吸ってるのは麻薬だね。安心しな。もうお前達の前に姿は現さねえよ。

藍川去る。緑山、深々とお辞儀をする。教会の鐘が鳴り響く。

暗転。

舞台は教会のまま。

鐘は鳴り続ける。舞台上には7人がばらばらにいる。

橙谷 皆さん！ 踊るんです！ 雨が降って虹が出たんですから踊るんですよ！ 振り付けなんてどうでもいいんです！ 性格だってバラバラです！ 何でもいいんです！ でも皆踊れば1つになるんです！

赤宮 踊りましょう！ ミュージックスタート。

鐘の音が小さくなり（消えない）、音楽が流れる。

全員バラバラに踊り出す。赤宮、メンバーを虹の順に並べ始める。

赤宮 あなたはここ。

赤宮 あーそっち行かない。あなたはここ。

赤宮 あなたはここ。

赤宮 ちよとちよと！あなたはここ。

赤宮 待つて待つて。あなたはここ。

赤宮 あなたはここ。

赤宮 それで私はここ。ほらっ！ 皆、笑って！ 笑って！ 笑顔で行きましょう！ 笑顔！ 笑顔！ 楽しくね。

踊り続ける。最後に一度全員の動きが合う。

赤宮 私はやっぱり書きたいんだ。私はやっぱり作家なんだ！ 書けなくても進み続けるんだ！ 私が私であるために！ 作家であるために。

暗転。

鐘の音が鳴り続ける。

赤宮はノートパソコンを前に寝ている。

橙谷 ルイさー！ーん！起きてください！

赤宮 あっ。スズ。

橙谷 何ですか。とうとうできましたか原稿。

赤宮 ファック。そう簡単にできたら苦労しねえんだよ。

橙谷 そうですよねー！ じゃあ何ですか話って。

赤宮 ちゃんとスズに答えなきゃって思って。

橙谷 僕クイズなんか出しましたっけ？

赤宮 この間！ そして昨日！ スズが私に行ったことへの！ 答え！

橙谷 あっ。ああああああカツオブシ忘れた。ああああああ！ はっはい。

聞きます。聞かせていただきます。

赤宮 どこまで本気なんだか。

橙谷 僕はいつも本気ですよ！

赤宮 知ってるよ。あっ！

橙谷 何ですか？

赤宮 外見て。

橙谷 はいっ。ああ。

赤宮 虹だ。

橙谷 虹ですね。あれはお迎えの虹なのかな……。

赤宮 は？

橙谷 いえ、なんでもないです。

赤宮 変なやつ。

青森が現れる。

青森 虹ですよ虹！ テンション上がります。

緑山が現れる。

緑山 虹だ虹！

黄瀬が現れる。

黄瀬 ほっほ。虹だあ。

赤宮 何でお前らいるんだよ！

橙谷 そりゃあ虹だからですよ。雨の後は集まりたがるんですよ。きっと藍川
さんも見てますよ。

赤宮 はあ？

橙谷 見えてますかー！ 虹ですよー！

暗転。

猫の声。

暗転中に紙がめくられ「END」に。挨拶。

幕。
。

おれの進むべき道があった！ようやく掘り当てた！

こういう感投詞を心の底から叫び出される時、

あなたがたははじめて心を安んずることができるでしょう。